

愛します、
寸刻だけ

〜
体験版
〜

義勇が去り、20畳はある広い和室に炭治郎と二人きりになった。

鑄鬼は畳に正座し、炭治郎も対面する格好で正座する。鑄鬼は鞆から荷物を取り出して地図を広げた。

「炭治郎、上弦の鬼の存在がこの街で新たに確認された。お前も気づいているんじゃないか？」

そう言う鑄鬼の視線は真剣だ。触ると切れそうな鋭さがあり、先程の和やかな雰囲気とは一転している。それを感じた炭治郎は、背筋を伸ばして広げられた地図を見下ろす。

「この、色街というのか・・・？このあたりから上弦の鬼の気配が、頻繁に報告されるらしい」

「あ、ここ・・・確かに、凄く強い淫気を感じたところだ」

炭治郎は、前回このホテル街あたりに探りを入れ、確かに上弦に匹敵する害ある淫鬼の気配を感じた。その直後、一般人から横やりが入って、迂闊にもハーブを吸わされて昏倒してしまったのだが。

「やはりそうか。協会でも他の派閥でもこの話でもちきりだ。存在を確認しているのに、討伐をしないなど、退魔業の名折れ。そこで、上弦の鬼をおびき寄せる方法を、協会は提案した」

「どんな作戦だ」

「お前に遊女になつてもらおう」

「・・・えっ？」

鑄鬼の言葉に、炭治郎は一瞬意味を飲み込めなかった。

「現代では風俗嬢と言うらしいな。それになりすまして、上弦の鬼が出てくるまでお前には耐えてもらおうのだが……」

「えっ、でも、俺男だし……風俗嬢！」

「今更何を驚いているんだ。いつも淫鬼にやっていることを人間とすることだと思えば軽い物だろう。性別は、術でいくらでも誤魔化せる」

鑄兎は簡単に言うが、この数か月、普通の生活を送ってきた炭治郎には貞操観念ができつつあり、誰彼かまわず相手をしなくてはならないというのには少々抵抗を感じた。

「う、うん、そりゃ淫鬼相手ならするけれど……」

「それなら問題はない。人間から陽気を吸うと思って、石になったつもりでなりきれ」

真剣な眼差しで鑄兎に言われ、炭治郎は目線を合わせないでいるのに精一杯だった。しかし、ヒノカミ協会からの通達とあらば、炭治郎は従わなくてはならない。鑄兎が派遣されたのは、色事が絡む任務なので、炭治郎が動きやすくサポートするためだろう。

力ずくの仕事ならば禰豆子が役立つが、知識も薄く、まだ十四の乙女である彼女に、この役回りは難しい。炭治郎もまだ十五の少年だが、性の手管に長けた修行を受けた身体にはこの任務は打って付けた。

「これって、いつから？」

「明日からでもするぞ。早く発見して討伐すれば、被害も少なくて済む。頑張れ、炭治郎」
そう言うって鑄兎は炭治郎の頭をぽんぽんと叩く。

「あの、俺、学校があるんだけど……」

「心配するな。そのあたりの補助に、俺が呼ばれた。お前の身体の調子を整える役目も担っている」
鑄鬼は胸を張って言い切った。

鑄鬼の妖力の凄さは、弟子である炭治郎は身に沁みて良くわかっている。しかし、明日から誰とも知れない者に抱かれるのだと思うと、心が重い。

これまで淫鬼を退治するために身体を捧げることに疑問はなかったが、相手が人間で、浄化の必要もなくてただ抱かれるだけと言うのが心に引っ掛かる。

「ちなみに、お前が働く店も協会は指定してあるぞ。この・・・店らしい」
鑄鬼はそう言って、地図の中の赤い印を指差した。

「なんでも協会の話では、本身を捧げるソオプ嬢ではなく、ヘルス嬢とか言う役になり切れという事らしいぞ」

「・・・」
ソープ嬢とヘルス嬢。炭治郎も座学で聞いたことはあるが、まさか自分がその立場になるとは思わなかった。

(でもこの仕事、キスはしないって話だし、いいかな・・・)

炭治郎はもはやもやした気分を抱えながらも、自分の中で整理をつけて、任務に向き直った。達精させるのに全身を使い、人外の快楽を与えてくる淫鬼と比べれば、人間相手など軽いものだ。そう思い直し、炭治郎は肝を据えた。

「うん、わかった！俺は頑張るよ！」

炭治郎は正座を正し、真正面から錆兎を見つめ返す。

「それじゃあ、錆兎、サポートよろしく！あつ、よろしくお願いします！」

その場で深々と頭を下げた。覚悟が決まった炭治郎の様子を見て、錆兎も安堵のため息をつく。

「危なくなったら、わかっているな？炭治郎」

錆兎は炭治郎の耳飾りに手を伸ばし、その左右に手を触れる。

(ん?)

左の耳飾りに違和感がある。妖力を込めて霊視してみると、黒髪が巻き付けられていた。

(義勇のか)

炭治郎や義勇からも毎日報告は届くが、同じように赴任している禰豆子からも報告は届く。正直、一番第三者目線で見ている彼女からの報告の方が、感情が入っていない分信憑性がある。

蜘蛛の鬼を調伏したとき、名前を呼ぶと義勇がどこからともなく現れたと言うが、炭治郎を思つての「加護」だろう。

そこまでこの弟弟子を想ってくれていることに錆兎は義勇に感謝を感じたが、同時にただならぬ執念のよくな情欲も感じて、少し触れる手が痺れた。

(炭治郎は義勇の教義の相手をしていないと言うが・・・)

改めて炭治郎の身体を見つめて霊氣の流れを読み取ると、これまで調伏してきた淫鬼や、補充された陽氣の影響で、炭治郎の身体はごちゃ混ぜになっている。

そして、協会への報告から、鬼舞辻無惨が炭治郎に接触してきたと聞いた時、周囲は大いに騒めき立った。

すぐにも炭治郎を呼び寄せて保護すべきだ、このまま泳がせて更なる無惨との接触を濃くし、皆でかかって退治しよう、などと思いが飛び交ったが、少し接触しただけで炭治郎の生身の身体が縮むほど霊力を吸い取る無惨に、やはり戦慄を感じ、結局様子見となったが、その警護のためにも錆兎は派遣された。

「柱」ではないが、「柱」以上の教義の成就を成している手練れの錆兎だ。

炭治郎が無惨に全てをとり返されるのを防ぐには、錆兎は適任でもあった。しかし、無惨の力は強大だ。錆兎自身でもわかる。

ヒノカミ協会は少し自分らを買収されているところがあり、また炭治郎を少し侮っている様子がある。

しかし、炭治郎こそ無惨一殺の切り札だと、錆兎も協会も理解していた。だからこそサポート役と銘打って、「守護」の役割も仰せつかっている。

錆兎は炭治郎を改めて見た。

赤毛に宝石のような赫い、零れそうなほどに大きな瞳に、笑顔を絶やさぬ柔らかな愛らしい顔。その身体には、容姿とはかけ離れた恍惚の淫欲が彼を取り囲んでいるとは、その場面をこの目で見るまで想像などできない。

しかし、会って理解したが、炭治郎は中身までは囚われていなかった。

これまで数々の淫鬼を調伏し、性交で退魔を行うという爛れた術を駆使しながらも、炭治郎は修業時代と変わらない清廉な気持ちを貫き通してきていることに、錆兎は嬉しく思った。

報告では、「柱」の一人の命を救ったと聞いた。炭治郎が称賛されると、我がことのように嬉しい。

「それじゃあ、任務の話は一旦ここで終わりだ。また、夜に協会から通達があるだろうから、俺たちはそれを待とう」

「ああ、わかった」

すると炭治郎は緊張の面持ちを解き、その場に立ち上がる。

「鑄鬼、ここに来てからお茶の一つも飲んでないだろう？ 疲れただろうから、用意してくるよ。それまで、この部屋でくつろいでて」

そう言うと、炭治郎は部屋の押し入れを開けた。

この部屋は徹底して和風にこだわっているらしく、クロークも押し入れになっている。開けると座布団があつて、炭治郎は一枚を取り出して鑄鬼に勧めめる。

そして押し入れの向こうには、布団が二式揃いである。

誰かが泊まりに来た時に、と炭治郎が気を利かせてこっそり購入して入れ込んでいたものだが、ようやく役に立つときが来て、少し嬉しかった。

「？それは布団か？」

荷物を整理しながら鑄鬼が背後から声をかけてくる。

「うん、フカフカだぞ！ 鑄鬼、疲れてるなら少し寝る？」

「ああ・・・疲れてはいないが・・・布団は敷いてくれないか」

鑄鬼の意見を疑問なく聞き入れ、炭治郎は一式を押し入れから取り出し、部屋の中央に広げた。

※中略※

「炭治郎、口に出して求めた方が、相手は悦ぶ。この控え目な所作も良いが、快楽に狂って鈍感になった相手には伝わりづらいぞ」

「う、うん、でも自分から口に出して言うのって、恥ずかしいから・・・」

「今更だな・・・本当は快楽が好きなんだろう？」

「うっ・・・」

炭治郎が、快楽が好きと言うのは正しくない。正確には、気持ちいいのを我慢する意思が薄く、快楽に流されやすいことだ。

身体を使って調伏する巫子として、淫に耽つてしまつては退魔どころではなくなる。しかし、炭治郎の無意識は快楽を悦び、我慢する意味がわからないという開き直りにも似た考えが染みついていて、

これも無惨に調育された結果なのだろう。二年掛けたが、終ぞ改めさせることはできなかった。

しかし、意識がはつきりしている時の炭治郎は、実によく堪えて、その心情をおくびにも出さない。

「お、俺は好きじゃない・・・男なのにこんなやり方でしか浄化できなくて情けない気持ちはあるけれど・・・」

「そういうことを言うな。俺だって同じようなもんだ。俺たちは因果な術を背負つてしまっているんだ。今更男が嘆くな」

鑄鬼はそう言つて、炭治郎の脇腹から下腹に両手を滑らせ、両手で雛先を包み込んだ。

「んっ……」

流れてくる妖気の快楽に、炭治郎の身体がヒクヒクと震えている。先端から淫液がこぼ、と新しく零れ、感じていることを鑄鬼に見せつける。

炭治郎の感じる部分も、達悦させる術も全て知り尽くしているが、しばらく離れていて間違いはないかと鑄鬼は少し疑心した。それとも、他の誰かに、あるいは調伏の連続で感じる場所が変わってしまったかもしれない。

片手で巧みに上下に摩擦し、先端を鈴口を中心にして捏ね回す。濡れた鈴口をくちくちと擦る音が卑猥に弾け、周囲の淫気が高まってくる。

鑄鬼の手の動きは巧みで、炭治郎に想像を絶する快感を与えてきた。

「あっ……あああっ！も、出るっ……！」

炭治郎が鑄鬼の首に両手を回し、力を込めて目をぎゅっとなつぶり、意識が遠のくほどの深い射精絶頂を迎えた。

「んっ……ん——……！」

射精の瞬間、炭治郎の腰が急激に折り曲げられ、ビクビクと痙攣し、吐精が終わるとゆっくりと身体が緊張が解けてゆく。

「はあ、は……は……」

炭治郎の達した顔を間近に見ながら、錆兎はまだゆるゆると雛先を愛撫している。射精してすぐに快感が終わらない炭治郎の性質を知っているので、炭治郎が気持ちよく降りられるように優しい刺激を与え続け、快楽を隅々まで食らせる。

「んっ、んん……はぁ……錆兎お……」

首に回った両腕がさらに締められ、炭治郎の方から錆兎に口づけを仕掛けてくる。

射精の凄悦で蕩けた顔と声で抱き継られ、炭治郎への愛くるしさが止まらない。

「ちゃんと射精できたようだな。炭治郎、しっかりしろ。気を持って」

「んん……」

未だ射精の余韻に浸っている炭治郎に、錆兎は冷厳な声をかけるが、小動物のように可愛らしい仕草をとる炭治郎に自分の官能が刺激されるのを嫌でも感じてしまう。

そのまま片手を炭治郎の双丘に這わせ、秘孔に触れるとやはりベタベタに濡れている。

男を迎え受ける準備が万端な炭治郎の身体を見て、錆兎は欲望が噴き出しそうになったが、堪えて、秘孔に指を一本挿し入れて胎の様子を探った。

「あああつ……！か、感じ……る……」

錆兎の、快楽を素直に訴えろと言う言葉をちゃんと踏襲しているらしく、炭治郎は恥ずかしがりながらも自分の身体の状況を素直に口にする。

「感じるだけか？」

そのまま指をぐるりと回されて、炭治郎の腰が震える。

「んんんっ……！ぞくって……して、止まらない……気持ちいい……のかな……」

「何を今更。これは快感だ。区別を判断できないのは褒められたことじゃないな」

「ご、ごめん……」

「何度も言うが、これは快感だ。気持ちいいんだろう？炭治郎」

指をもう一本増やされて、洞内を巧みな動きで探られる。性の教義で中級の奥義を極めた男の手管は、とても侮れない。

「んんんんっ……！そ、そこ、だめ……！」

義勇も巧みな動きをするが、錆兎は性感神経を直接触れているような激感が襲ってくる。その感覚の前では、炭治郎は何も考えられなくなって身悶えするしかできず、甘い声で喘ぐだけだ。

錆兎の指は熱い。これまで炭治郎を抱いてきた男たちの指も熱かったが、錆兎の熱さは、身体の淫の芯を心地よく温めてくるような、全てを委ねたくなる熱さだった。

指先が胎の性感に当たり、炭治郎が腰と両足を震わせる。

「うああっ……！」

指で性感帯を抉られた瞬間、身体が蕩けるほどの愉悦が訪れた。炭治郎の腰がブルブルと痙攣し、達悦の激しさを物語る。

「果てやすいのは相変わらずだな。無惨に身体を干渉されたと聞いているが……」

錆兎の指はさらに炭治郎の奥に進み、指で到達するギリギリの深さまでを探ってくる。

その指の一本一本から妖気が流れ込み、炭治郎は快樂のため息と共に錆兎のされるがままになっていた。

絶頂の余韻で目の焦点が合っていない炭治郎を見下ろしながら、鑄兎は指を引き抜き、自らの渾身をその秘孔に当てて。

「んんっ……もう……?」

性急な鑄兎の行動に、炭治郎が甘えた声で呟く。

「無惨の陰気を封じた奥を探るには、指では届かないからな……少しキツいかもしれないが、耐えろ、炭治郎」

「ん……鑄兎に任せる……」

可愛らしい言葉を無意識に吐き、どこまでも男の情欲を煽ってくる。修行時代の炭治郎はこんなに煽情的だっただろうか。修練と離れた場所で抱くということで、鑄兎の興奮も違っているのだろうか。

炭治郎に自分の両膝を抱えるようにさせ、足を開き、腰を突き出す格好にさせる。何度もこの体勢で交わったと言うのに、炭治郎は照れ臭いのか視線を鑄兎から外している。

秘孔はすでに淫蜜で濡れ、渾身を挿し入れるのに問題はなさそうだ。

「炭治郎……挿れるぞ……」

鑄兎は渾身の先端を秘孔に押し当てると、そのまま胎内へとゆっくり侵入させた。

「んんんんっ……!」

炭治郎の腰がブルリと震えたが、最初にその反応があっただけで、それから先の挿入は潤滑に行われた。はあはあと炭治郎が吐息を声に出して喘ぎ、感じているのを訴える。

良質の妖気を纏った塊を挿入され、炭治郎の身体が歓喜に震え、全身が総毛立つ。まだ途中まで挿れられただけだと言うのに、快感が生じて息が上がってしまう。

「んんっ……！中に挿れながら、そこ触るのはダメ……！」

炭治郎が濡れた声で拒否を訴えるが、好いと思っっているのは明らかだ。錆兎は挿入を進めながら炭治郎の雛先にも掌で同時に刺激を与えてやる。快楽に弱いこの身体は、一度に快楽を重ねて与えられるとすぐに悦に流されてしまう。

「炭治郎、こんなに淫に耽っては調伏どころではないのではないか……」

「んあっ！そ、そんな事、ない……いつもは、もっと……堪えてるし……だって、相手が、錆兎だから……」

顔を欲情とは別の顔で紅く染め、炭治郎が言い訳をする。

（そんな嬉しいことを自然に言うな）

錆兎は思ったが、そのまま黙って身体を進めた。

「んんっ……ん、んん……」

炭治郎の身体が細かく震え、背中に回された腕が錆兎の着物を握り締める。炭治郎は全裸だが、錆兎は着流しを着たまま、裾の前を大きく開いて、渾身だけを露出させて炭治郎を抱いている。

（相変わらず、男殺しの胎だ）

炭治郎の中は昔と変わらず、全方向から雄を甘く締め付け、揉みしだいてくる。さらに淫蜜に濡れて滑り、錆兎は興奮と快感で生唾が湧き上がってくるのを止められない。

淫鬼を退治するためには、胎内の具合は生中なものでは役に立たない。ヒノカミ協会の密儀によって、炭治郎の身体は花蜜に改造されている。

※中略※

「あつ！ああつ！あああつ！は、挿って……！」

「大丈夫、ゴムつけてるからっ……」

（そういう問題じゃない！）

「抱く」と言われて最初は半信半疑だったが、本当に挿入されて炭治郎は仰天してしまう。

そして、これまで高められた性感が急激に活性化し、雄を迎え入れる悦びに身体が震えてくる。

「んんっ……ああ、はあ、ああ……」

そのまま胎内の奥まで挿入され、その刺激に炭治郎が快感の吐息を吐く。

「わあ……凄いな、君の中……すごく締まって、熱くてチンポをぐにぐに揉んでくれるよ。ああ、いいなあ」

自分の胎の様子を実況されて、炭治郎はますます顔を朱らめた。

（ただの研修なんだから早く終わってほしい……って言うか、これ研修かな？違うんじゃない……）
人の良い炭治郎は、犯されているのに店長の言葉に翻弄されて身体を明け渡してしまっている。

相手は淫鬼ではなく普通の人間だが、それでも挿入され、引き抜かれる度に全身が総毛立つ快感が炭治郎の肌を震わせる。店長は後ろの扱いを心得ているらしく、炭治郎が感じるように腰を小刻みに動かしたり、大きく上下に動いたり技巧を凝らしてくる。

「ん、あ、ああああつ！はあ、はあ、はああつ・・・！」

炭治郎はいつもの癖で相手の背中に両腕を回し、すでに快感に流されつつあった。

（中で擦れてる、も、もう果てそうだ、だ、だめだ、これはお仕事・・・研修の段階で快楽に飲まれたら、この先耐えられない・・・！）

しかし店長に突き動かされる度に、どんどん絶頂への感覚が蓄積してゆく。自分が達するより早く店長をイカせればいいだけの話だが、デイルドでの刺激や指の刺激で煮え始めていた胎内は、雄の熱さを喜んで快感として迎え入れてしまっている。冷たさを感じる淫具より、物足りない指よりも、肉棒が挿入されるのが一番感じてしまう。

秘孔に挿入されるのは普通、かなり慣れないとひどい苦痛が伴うと言うが、炭治郎の身体は呪術的に改造され、痛みは一切無く、快感だけを拾い、さらに女の愛液のように胎が濡れるようになっていく。

何も知らない童貞が炭治郎を抱いてしまったら、この先一生、これ以上の快感を感じることなく、物足りない時を過ごしてしまうのでは、と思われるほど、炭治郎の胎は最上の性器だった。

「んんっ！んんっ！あ、あああああつ！あつ、あつ、あつ、あつ、激し・・・ですっ・・・！」

興が乗ってきたのか、店長の腰遣いが荒くなり、炭治郎の身体が激しく揺さぶられる。胎内の快感は体中に伝播し、印象操作で見えなくされていく難先からも先走りの淫蜜が零れてしまい、股座はローションと淫蜜でコップの水を零したかのようにひたひたに濡れてしまっている。

「はあ、はあ、凄く好いよ、絶対売れっ子になる、保証する・・・」

炭治郎の身体に絶頂が迫り、腰の奥がじん・・・と痺れた。それと同時に胎内が肉棒を極限に愛撫し、店長はあえなく絶頂を迎えてしまった。

「んん、くっ・・・！」

汗まみれになった店長は、その雫を炭治郎の肌の上に零しながら射精絶頂を迎えたが、コンドームをさけているので精液から陽気を取り込むことができなかつた炭治郎は、ただ悪戯に体力を消耗して絶頂しただけだった。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

ぬるん、と秘孔から肉棒を引き抜き、胎の絶頂で陶酔状態にある炭治郎の表情を見て優しく笑い、再びその赤毛を撫でてキスをしてくる。

「すぐくよかつたよ。俺はイキにくいほうなのに、凄い身体だね・・・」

「んっ、はあ、は・・・ありがと・・・ございます・・・」

炭治郎は妄とした頭に、精液を飲み損ねた身体の疼きを感じながら、額の汗をぬぐった。それから二人で風呂に入って、店長は炭治郎の身体を丁寧に洗ってくれた。

「それじゃあ、店でお客さんが付くのを待つてようね」

と促され、炭治郎と店長は二人で店に帰ってきたが、この有様である。

(も、もう帰って寝たい・・・)

緊張と衝撃の連続に、炭治郎は早くもバテ気味だった。

しかし帰って来てすぐ、窓口の青年が

「炭子ちゃんご指名入ってますよ」

と早速報告に来たので、いよいよ炭治郎の風俗デビューとなった。

「えっ！もうですか？ど、どうしよう！どうしたらいいですか？」

いきなりの展開に炭治郎は慌てふためき、店長に目で継る。炭治郎の焦りを受けて、店長も慌て気味でアドバイスをしてくれる。

「トークで繋ぐんだよ！トークで！頑張って！」

しかも標準が一時コースなのに、いきなり一時間半コースだ。

炭治郎は例の透明のバッグを持たされ、「ホテルはアジアンで」と言われて部屋から出ると、エレベーターの前で待つように言われ、少しすると奥から炭治郎と背丈の変わらない初老の男が歩いてきた。

(えっ？この人？)

さぞ性欲を持って余した若者が来るのだろうと思っていた炭治郎は現れた初めての客に戸惑っていた。

「じゃあ行こうか」

そう言われて、先を促される。指定されたホテルは、先ほど店長と帰ってきたばかりの場所だ。

(お、俺これからこの人に・・・)

いきなりの展開に炭治郎は慌てふためき、店長に目で継る。炭治郎の焦りを受けて、店長も慌て気味でアドバイスをしてくれる。

「トークで繋ぐんだよ！トークで！頑張って！」

しかも標準が一時間コースなのに、いきなり一時半コースだ。

炭治郎は例の透明のバッグを持たされ、「ホテルはアジアンで」と言われて部屋から出ると、エレベーターの前で待つように言われ、少しすると奥から炭治郎と背丈の変わらない初老の男が歩いてきた。

（えっ？この人？）

さぞ性欲を持って余した若者が来るのだろうかと思っていた炭治郎は現れた初めての客に戸惑っていた。

「じゃあ行こうか」

そう言われて、先を促される。指定されたホテルは、先ほど店長と帰ってきたばかりの場所だ。

（お、俺これからこの人に・・・）

そう思うと、心音の高鳴りが止まらない。緊張で握る手に汗が滲んでくる。しかし、それを表に出してはプロとやら失格なのだろう。

炭治郎は自分を落ち着かせるために静かに深く息を吐いたが、心音は止まらない。

「ああホテルはこっちです・・・」

先を歩いていた初老の男にホテルの場所を指示すると、男は笑顔で振り向いた。

「うん、知ってるよ。アジアンでしょ」

そのまま炭治郎を引き連れて指定のホテルに到着した。炭治郎にすれば、とんぼ返りと言ったところか。

(えーっと、ホテルについたらフロントの電話で、ホテルですって、言うんだっけ……！)
入店した炭治郎は、ギチギチに固まった身体で電話に手を伸ばす。受話器を取ってしばらく呼び出し音がすると、女性の声で「はい」と返事があった。

「あの、ほ、ほ、ホテルです……」

すると相手は、はいーと言ってガチャリと電話を切る。すると、背後の壁に備え付けられたパネルが点灯し、炭治郎たちの部屋を照らし出した。

(落ち着け、落ち着け俺……いつもの淫鬼を浄化するよりマシだと思うんだ、むしろ、陽気を取り入れられるんだから……いや、ゴムしてるから取り入れられないけれど……！)

「大丈夫？」

急に初老の男に顔を覗き込まれて声をかけられ、炭治郎はその場で飛び上がった。

「ひええ！」

悲鳴を上げた炭治郎に初老の男は優しい笑顔を向けてくる。

「大丈夫だよ、新人さんなんだろ？僕は慣れてるから教えてあげるよ」

その笑顔と頼りがいのある言葉に、炭治郎は縋りつきたくなった。しかし、ここでようやく我に返る。

(お、俺は今、奉仕する側で、この人はお客さんなんだ！お客さんに頼るプロなんて、聞いたことないぞ！
がんばれ！俺！長男だろ！)

炭治郎は初老の男について歩きながら、細く長く息を吐いて、ようやく自らを落ち着かせた。

あてがわれた部屋は、先ほど店長と使用していた部屋とは違い、倍ほど広く、天蓋付きのベッドが中央にある豪華さだった。

たまたまあてがわれたのか、この男が指定したのかはわからないが、炭治郎は一般のホテルよりも豪華な部屋の装用に感心してしまう。

それよりも、とりあえずこれから支度しなくてはならない。

渡されていたガラケーで店に連絡を入れ、従業員に伝える。

「炭子です。ホテル「アジアン」一時間半、お願いします」

そしてストップウォッチを操作して、90を表示させ、スタートボタンを押す。

店長に教えられた通り、洗面所に湯を溜めてローションを入れて人肌に温め、その間に風呂に湯を張る。この間、男が取り残されているのはと気づき炭治郎は思考を巡らせた。

(そ、そうだ、トークだ、トーク……でも何を話せば……！)

「お嬢ちゃん、なんでこの仕事やり始めたの？」

気を利かせてくれたのか、初老の男から優しい声で質問が来た。

「えっ、あー、はい、あの、えと、ああ、せ、専門学校に行きたくて……」

バタバタと洗面と風呂を行きかいながら、炭治郎は苦し紛れにそう答える。我ながら良い理由だと思う。次からも使おう。

「一人暮らし？」

「あつ、いえ……同居してます。とみ……あ、や、違う、先輩と……」

嘘が下手な炭治郎はいちいち返事をするのがぎこちなくなってしまう。

(この時間苦手だ、もうとつととやることやって、終わりたい！)

しかし、炭治郎はこの初老の男と一時間半、過こさなないといけいないのだ。

思しったより風呂の湯張りが早く、炭治郎は男に「お風呂に入って来てください」と、催促した。初老の男が服を脱ぎ始め、炭治郎も服を脱ぐ。

「・・・ブラジャーしてないの？」

「えっ？」

上裸になって指摘され、炭治郎はようやく思い至った。そうだ、年頃の女の人はブラを付けていて当たり前だ。

「おっぱい小っちゃいからって、油断したらダメだよ。若い女の子が」

炭治郎は、はあ、と返事をしてズボンも脱ぎにかかろうとしたが、下は禪だ。さすがにまずいと思つたところで、初老の男に背中を見せ、ズボンを降ろす。禪が食い込んだ双丘が露になり、男がこちらの裸を注視しているのを感じる。

(Tバックを穿いていると勘違いしてくれ！)

その炭治郎の願ねがいは通じたのか、男は別に何も言わず自らの服を脱ぎ進めた。

(よかった、何も言われなかった)

しかし明日からは気を付けなければならない。今日の仕事が終わったら下着を買いに行こう、と炭治郎は決めて、素早く全裸になった。

「本当におっぱい無いねえ」

意識操作で女体に見えるようにしているが、実体がないのに巨乳などにはできない。触られると怪しまれるので、極力控えめな乳房として目に映るように炭治郎は操作していた。

「す、すみません、その代わり頑張ります！」

炭治郎はそう言つて、初老の男を風呂場に入らせ、シャワーの前に立たせると、用意していた専用のボデイソープで局部を洗う。

このボデイソープで痛がる客がいたら、それは病気持ちの証抛らしい。願わくばそういう輩には当たりたくないが、とりあえずこの男は何の反応もないのでクリアと言ったところだ。

そのまま陰毛で泡立てたソープを体中に塗りたいくらい、シャワーで流し、向かい合つて一緒に風呂に入る。出会つてすぐのオジサンと、全裸で風呂に入っている自分が滑稽だ。

「こっちへおいで・・・」

そう言われて手を引かれ、男の腕の中に抱き込まれる。義勇によくされる仕草だが、人が変わると感触も全然違う。義勇の腕は太く硬く、頭を預けても問題ない安心感のある腕だが、この男の腕に頭の重さ全てを乗せるのは気が引けた。

「ん？君の肌はなんだか凄く滑らかだね」

「そ、そうですか？」

会つて数分の男と一緒に風呂に入り、身体を撫で回されているということの非現実感が凄い。

男の手が炭治郎の両足の間に入ろうとするのを、さりげなく足を閉じて止める。両足の間に手を入れられ
たら、操作で消している実体である雛先に触れてしまう。

「じゃあそろそろ出ようか。もつと君の肌を触ってみたい」

初老の男の言葉で炭治郎も湯船から出て、身体を適当に拭く。部屋に戻ると、そのままベッドの上に寝る
ように指示されて、炭治郎は仰向けになった。

（早く射精させて終わらせたいんだけどな・・・）

このぐらいの年齢の男性なら、一度精を吐き出せば満足するだろう。明け透けな言い方をすれば、とつと
とシリにぶち込んで、終わってほしい。

上から男に覆い被さられ、いきなりキスをされてしまう。客相手にされたら反射的に突き飛ばしてしまう
かもしれない、と炭治郎は自分を心配していたが、人間の舌の体温と唇が気持ちよく、炭治郎は目を閉じ
て案外素直に受け入れてしまった。

（これからもたくさんの人とキスしていくのかな）

ぼんやりそんなことを思いながら初老の男の唇が炭治郎の首元を伝い、右手が肌の上を滑っている。

「本当にいい手触りだ・・・若いから、っただけじゃないね。何か特別なケアしてる？」

「いいえ、別に・・・」

そこまで言って、炭治郎は自分の言動に気づいた。先程から自分で話を終わらせてばかりだ。なんとか店
長に言われたように話を繋げていかないと、接客業失格というものだ。

「あ、その、食べ物には気を付けています」

※中略※

義勇は首に下げた琥珀のネックレスを弾いて、時間の流れが止まる時空結界を張るべく、指先に妖力を込め、結界を形成した。

これで二人の邪魔をするものはいない。義勇は炭治郎の腰を抱え直し、今度は渾身を胎深くまで一気に突き立てた。

「ああああああ・っ！」

「炭治郎、辛かったら言え。俺は今夜、手加減ができない」

「は、はい、わかりました、義勇さま……」

しかし、炭治郎が訴えたとしても義勇の欲望は止まらないだろう。

結腸部分に近い、無惨の陰気を封印している結界に渾身の先端が当たって、義勇は灼けるほどの快感を感じたが、炭治郎はそれ以上に感じるらしく、身体を大きく仰け反らせて、あああ、と艶声を上げた。

相変わらず乱れる姿は美しい。愛らしくて、頭から食べてしまいたくなる。

義勇が欲望をどんどん膨らませているところで、結界に異常を感じた。

張ったはずの時空結界の一部が捻じ曲げられ、侵入者の来訪を告げる。

「義勇！炭治郎に何をしているんだ！」

現れたのは、眉を逆立てた浴衣姿の錆兎だった。

快樂に水を差されて、義勇は不機嫌に振り返り、一言だけ告げる。

「セックスだ」

開き直った義勇の言葉に、鑄兎は少し顔を上気させるほどの怒気を孕んで、こちらにドスドスと近づいてくる。

「義勇、炭治郎は余計な精を取り込むと均衡が保てなくなるんだ。お前のことだから炭治郎を抱いていないと言う事はないだろうとは思っていたが、そこまではやりすぎだ」

時空結界を張ってまでの性交の事を言っているのか、無惨の結界に触れたことを指摘しているのか、判然としない。

ただ、義勇には炭治郎を横取りされた鑄兎の憤怒も感じられて、ふっと笑った。

「同じ穴のムジナじゃないか・・・」

「？義勇、何を言っている」

二人のやりとりで行為を中断された炭治郎は、義勇の背中に手を回してしおらしく顔を見上げてくる。

「義勇さま・・・どうしたんですか・・・？」

それを聞いて、鑄兎はさらに激高した。

「義勇！お前、炭治郎に自分の名前を呼ばせているのか！」

「・・・それでなければ、無惨無惨と連呼するので、気分が悪いからな」

「お前は・・・事の重大さがわかっていないようだな・・・！」

唇が震えるほど、錆兎が怒りを露わにしている。少し厄介だな、と義勇は思いながら、炭治郎の中から渾身を抜き、錆兎に向き合って話を聞くことにした。

「名前は呪いだ。身体の霊気が乱れると、炭治郎の中に封印している無惨の陰気が活発化して、一晚だけ、無惨に囚われていた時の性奴隷に戻ってしまう。炭治郎には辛いだろうが、射精させるだけの行為でしか、その身体を慰めてはいけないんだ！無惨の気が蠢いているときに胎内に精を吐き出すなど、言語道断！炭治郎の身体は増々淫乱になってしまおう！」

捲くし立てる錆兎をいつもの無表情な目で見つめながら、義勇は聞き入っている。

確かに、閨を共にする回数を重ねてから、炭治郎は随分素直に、淫乱になったとは感じていた。しかし、それは無惨の陰気によるものだろうか。

セックスのときは必ず中に精を放っているが、無惨の結界は揺るぎないし、中の陰気も活発になる気配はない。

「義勇さま・・・？」

二人のやりとりを、義勇に組み敷かれたまま聞いているはずの炭治郎だが、相互の話の内容などどうでもよく、途中で止められた快樂の続きを乞うように義勇の腕に指を滑らせてくる。

「それと、名前は危険なんだ、義勇。炭治郎が無惨の名前を口にして夜這いしてくるのは、無惨の呪縛に未だ囚われている証拠だ。その上、別の名前を上乗せされてしまったら、炭治郎の無意識が壊れてしまう危険がある」

それを聞いて、義勇は自分の行為の迂闊さを少し後悔した。

最初に無惨を求めてやってきた炭治郎に、自分の名前を恐る恐る呼ばせてみたが、影響はないようだったが、それは義勇の都合のいい補正だったのだろうか。

（そうだったのか。しかしヒノカミ協会もずいぶん杜撰だな。炭治郎にとってそんなに大事なことを伝えてくるどころか、「お情けを」などと煽るような文を書いておいて、一体どちらが正しいんだ？）

義勇が思案していると、錆兎はまた新たに怒る要素を見つけて詰め寄った。

「義勇・・・まさか、炭治郎を教義の相手にしているんじゃないだろうな」

そう言われて、錆兎とは目を合わさずに義勇は黙っている。

「炭治郎はただでさえ、性技を持って相手を調伏する特殊な方法をとるんだ。身体の消耗を考えろ。俺たちの相手などさせたら、衰弱死してしまうかもしれない！」

「・・・真菰のようにか？」

それを言われ、錆兎は突発的に義勇に拳を繰り出した。

義勇は避けもせずそれを受け止め、ソファに倒れる。顔を上げると、錆兎の拳が震え、唇を血が出そうなほど噛み締めている。

「・・・悪かった」

義勇はさすがに言いすぎたと自分でも後悔し謝罪した。殴った錆兎も少しバツが悪そうに瞬きをする。

義勇はそのまま、目を焔めかせて見てくる炭治郎を眠らせようと、額に指先を当てた。

「義勇、やめろ！それ以上炭治郎に術を掛けるな！本当に壊れてしまうぞ！」

必死な錆兎の声に、義勇は指を下ろし、錆兎に不満の顔を見せる。

じゃあどうすればいい、とでも言いたげな表情に鑄兎も一瞬戸惑ったが、ふう、と息を吐いて二人に詰め寄った。

「炭治郎を抱くのは今晚きりだ。明日にはまた任務がある。身体に負担をかけるような抱き方は絶対にするな」

鑄兎はそう言ったが、男同士ならば受け手は間違いない大きな負担を受けてしまう。慣れているという炭治郎でも、それだけは普通と変わらない。

「鑄兎、お前も加われ」

義勇の提案に、鑄兎は目を丸くして怒気を膨らませたが、怒鳴る前に義勇が言葉で遮った。

「今日の炭治郎は妙に欲しがる。俺が危険な抱き方をしているなら、止める。明日の任務もあるから、二人で妖気を分け与えてやれば十分だろう」

それを聞かされ、鑄兎は浴衣を脱いで全裸になる。義勇が何か言おうとするより早く、炭治郎の上体を起こして背後から抱き着き、言った。

「お前の技術が衰えていないのを、この目で見させてもらうか」

鑄兎が炭治郎の耳に舌を這わせ、義勇は再び炭治郎の両膝の裏を担ぎ上げて、渾身を胎内に挿入させた。
(義勇、お前には才能があったというのに、何故出奔したんだ)

そう思いながら、鑄兎は喘ぐ炭治郎に口づけて薄目で義勇の所作を見守った。

義勇と鑄兎は炭治郎をソファに座らせると、義勇が前、鑄兎が背後からその身体を抱きすくめた。

「ああ・・・気持ちいいです・・・」

単純な人肌の温もりでも悦に感じ、甘い声を上げる炭治郎が可愛らしい。

「炭治郎、鑄兎も加わることになったが、良いか？」

「ん・・・鑄兎・・・さびと・・・鑄兎・・・様・・・？」

これでいいですか、とでも言わんばかりの疑問符がついた語尾に、義勇は頷いてみせる。義勇との二人のセックスにもう一人加わるということに抵抗を感じていない様子が、なんだか哀れを誘う。

義勇が口づけをしてやると、炭治郎もそれに応えて激しい舌遣いを始めるが、急に動きを止めてしまう。鑄兎が背後から両胸の桜色を指で愛撫し始めたのだ。

「んっ、ああ・・・」

炭治郎の背中がのけ反り、鑄兎の指技に身悶える。硬く充血した桜色を指先で挟んで擦り、時折きゅうと締めてみると炭治郎の身体が縦に揺れた。

「ああっ・・・！」

身体中の性感が解放された状態の炭治郎は、全身が極めて敏感だ。性感帯を触らずとも、どこに触れてもヒクヒクと肌を震わせ、その微細な反応で相手を愉しませる。

「んっ、あ、鑄兎さま、そこ、気持ちいいですっ、あ、ああ、あっ！」

さらに後ろから耳も舐められて、上半身をヒクヒクと痙攣させて甘い声を上げる。

鑄兎の愛撫ばかりに反応する炭治郎がおもしろくない。義勇は再び口づけすると、下肢へと手を伸ばして雛先に触れた。

「はあ・・・あ、あああつ・・・！」

上半身と下半身の両方に快感が走り、炭治郎が愉悦のため息を吐く。

雛先を握った義勇は、すでに濡れそぼって滑りが良くなっていてそこを片手で上下に扱きながら、親指の腹で先端を捏ね回してやる。先が弱い炭治郎は、たちまち先走りの淫蜜を零した。

「ふあ、あああつ、あああああつ！いい、好いです、んっ・・・んんっ・・・」

顎を取られて再び義勇に口を塞がれ、甘えた鼻声で炭治郎が善がる。

鑄兎の指使いがさらに巧みになり、摘まむ指に力を入れて強くして、同じ調子で擦り始めた。一気に上半身で感じる快感量が増え、炭治郎は背中を軽く仰け反らせた。義勇の唇から離れかけたが、手を顎にかけて離さないように口づけを続ける。

義勇も鑄兎に負けじと、雛先を愛撫する手をさらに巧みに動かしてゆく。ぬるぬるとした表面を素早く上下に擦り、我慢させる隙も無く射精絶頂へ導こうとする。

「あつ・・・あああつ！あつ！あああああつ！」

鑄兎に桜色を強く抓まれ、義勇に雛先をさらに激しく扱かれ、炭治郎は背中を弓なりに反らせて射精絶頂を迎えた。

雛先の先端から白液が吐き出され、快楽から解放された下肢が弛緩してその場に崩れ落ちそうになるが、上半身を背後から責めている鑄兎が炭治郎の身体を支えているらしく、横たわることは許されなかった。

「ん、はあ、はあ、む、胸え・・・感じる、よお・・・」

素早い指捌きで桜色を擦り立て、炭治郎が快感から逃げるように背中を丸める。まだ胸での達悦は時間がかかるとみて、義勇は再び炭治郎の雛先を弄び始めた。

今度は、輪っかにした指を根元に食い込ませながらの愛撫だ。

「んんっ・・・！ああ、いや・・・」

快樂に素直な炭治郎は、それを堰き止められると鳴き声のような善がり声をあげる。おそらくこれまで強制射精止めの責めをされたことがあるのだろう。しかしこの状態で先端を掌で円を描くように捏ね回すと、実に良い声で鳴くのだ。

「あ、ああ・・・ああ・・・っ、あ、んんっ・・・」

上半身と下半身の両方を責められ、身体中が熱くてどこもかしこも性の疼きが起こっている。

しかし不意に胸から錆兎の指が離れた。片手で炭治郎の身体を支えて、もう一方の手で秘孔に指を突き挿れる。

「ああああ・・・」

一度義勇に抱かれた炭治郎のそこは柔らかくなっていたが、締め付けが非常に強い。しかし、あふれる淫蜜がぬめりを強くし、指はすんなりと根元まで挿った。

炭治郎の身体のツボを心得ているのか、錆兎の指が秘孔に挿ると、雛先が一気に張りつめる。おそらく止めていなければ射精したのであろう勢いに、炭治郎は身体を打ち震わせる。

「あっ！あっ！そ、そこ好い、ああああっ！だめ、それだめ！イク、果てるっ・・・！」

指一本で、炭治郎が異常なほどの反応を示す。房中術の指南役であるということもあり、錆兎は炭治郎の身体のを知り尽くしているのだろう。

義勇はそれが少しおもしろくない。罰を与えるように、根元の指の輪をさらに狭めて、もう一方の手で握り込んでくびれに向かって激しく上下に擦り立てる。

髪が逆立つほどの快感がぞくぞくとせり上がり、炭治郎は首を仰げ反らせて大きく反応した。

「炭治郎、こと後ろ・・・どっちが好い？」

義勇が欲情を隠し切れない声で炭治郎の耳元に囁く。快楽の波の中で突然問いかけられ、炭治郎は戸惑った様子だったが、背後の錆兎がまた好い部分を責めているのか、顔を苦痛のように歪めて、ああ、と喘いだ。

「んっ、あ、後ろ、好い・・・前も、堪らない・・・イかせて、イかせて・・・」

「そんなに達したいのならば、させてやろう」

「ああああ！」

後ろの錆兎が技巧を凝らしたのか、炭治郎の身体が激しく痙攣し、直後身体を再び弛緩させた。錆兎にとつては、炭治郎を達悦させるなど造作もない事なのだろう。

秘孔を責める指は一本からいつの間にか三本になるが、さらに量が増えた淫蜜が滑りを良くしていて、締め付けが強いことに反発できれば道内は自由に愛撫できた。

胎内の好い部分を指先で激しく擦ると、それだけで炭治郎の身体に快楽の電流が走る。垂れそうになった涎を飲みこみながら、再び迫りくる絶頂感に身体が激しく期待してしまう。

「んぐううつ・・・ふあ、ああ、あつ、あつ、ま、また・・・待つて、待つて・・・」

とても待つて欲しいとは聞こえない、むしろ強請るような声に、二人の男の雄の琴線がかき鳴らされる。義勇は炭治郎を堰き止めたままくびれを集中的に責め、ドアノブを捻る様な動きで左右に激しく擦り立てる。

「あつ！ああつ！あああああつ！あつ！あつああ・・・！で、出る、離して、離してください・・・」

炭治郎が、はひはひと息を継ぎながら必死に訴えるが、義勇はまだ許してやるつもりはない。奥の種玉も掌で揉み込み、さらに射精感を煽って、炭治郎を辛くさせる。

「んんっ、んっ、あ、はあああつ！イク、イク、あつあああああ——！」

下半身がビクビクと痙攣し、軽く広げられた両足の太腿を淫蜜が伝っているのを、間接照明が照らしている。実に淫靡で美しい光景だ。しかし、男たちは炭治郎をまだまだ味わっていない。

義勇は雛先を蹴りながら、桜色の片側に唇を付けた。

「ふあ、あああああ・・・！」

下半身の前後に加えて、再び上半身の快楽を与えられ、炭治郎は感に耐えた声をあげる。

舌先を硬くして桜色の突起を上下に弾き、今度は柔らかくして舐め回し、歯で上下に軽く噛んで、炭治郎の身体を縦にヒクつかせた。

「ああああああ・・・っ！」

そのまま吸い上げると、身体が更に跳ね、悲鳴のような喘ぎ声をあげる。どうやら吸われるのが好きらしいと義勇は理解した。

連続して吸い上げ、吸盤のように強く吸い付いて、そのまま桜色を引つ張って限界まで伸びきったところで唇から抜けるように引き離されると、炭治郎はその瞬間にたまらなく短く甘い声をあげた。

「あああああ……っ！」

その声が総毛だつほどの色香で、義勇は聞きたくて何度も同じ愛撫を繰り返す。

「んんっ、はあ、いい、イク、も、もう、それ、だめ、あ、あ、あ……！」

炭治郎の切羽詰まった声を聞いて義勇は桜色を食み、硬くした舌先で円を描くようにして責め、吸い上げてやった。

「っ、あ、あああああっ！」

上半身がヒクヒクと痙攣し、炭治郎は堰き止められている雛先も震わせた。太腿の間からさらに量が増えた淫蜜が零れ、達悦したのは明らかだった。

「んっ……義勇さん……」

炭治郎から強請るような甘い声が零れる。雛先を堰き止められて切ないのだろう。しかし、義勇が炭治郎の願いをかなえるより先に、錆兎が動いた。

「あっ！ああっ！あっ……！」

ジュブ、と水の絡んだ音がして、錆兎が背後からさらに炭次郎へ密着する。恐らく胎内へ挿入したのだろう。立て続けの絶頂で身体が極めて敏感になっている炭治郎に取っては、甘美すぎる一撃だったに違いない。

指だけで慣らされ、絶頂させられていたが、胎の奥は刺激が欲しくて我慢が限界に達するほど欲してきた。そこで鑄兎にまちわびた渾身を突き挿れられ、その快感に炭治郎の意識はひとたまりもなかった。洞内のあちこちが一斉に歓喜の声をあげ、自分を悦ばせる雄を迎合する。

※中略※

わ、ほんとに女装すんの？た、炭治郎、言っとくけれど俺は制服が着たくて良いって言ったわけじゃないからな！」

善逸が必死に言い繕うが、まんざらでもない表情をしているのは本人だけが知らない。

「スカートってヤツ穿くのかよ？めんどくせえなあ・・・」

鑄兎に制服一式を渡され、伊之助が顔をしかめながらスカートを取り上げる。

「よし、じゃあ皆着替えろ」

鑄兎が言い、炭治郎と伊之助は服を脱ぎ始めたが、善逸が急に嫌がり始めた。

「ヤダ馬鹿うつそ！ここで着替えんの？俺恥ずかしいよ！」

「・・・男同士だ。何も恥ずかしいことなどないだろう」

「いやいや恥ずかしいって！俺だけちよつと別の部屋で着替えさせて？」

騒がしくする善逸に鑄兎が不機嫌になるのを見て、炭治郎は慌てて善逸に言う。

「善逸、廊下で着替えてこい！着終わったら入ってくればいいじゃないか」

そのまま背中を押して善逸を追い出し、炭治郎と伊之助は女子の制服に着替え始めた。

白の長袖シャツに赤のネクタイ、膝丈の長さをした紺の深Vネックのジャンパースカートだ。

炭治郎はその形状を察して難なく着られたが、伊之助がおぼつかない。

「・・・なんかここダルダルになるんだけど・・・」

「前と後ろを間違えてるぞ、伊之助。それに、これは肩に掛けるんだ」

立って伊之助にバンザイをさせ、スカートを回して吊り部分を肩に掛ける。止まっていないシャツの前のボタンを全部止めると、伊之助が「うぜえ！」と嫌がったが、ここだけは絶対に留めておかなければならない。

ネクタイを締めて終わらせると、元が良すぎる伊之助は完璧な清楚系美少女になった。

「様になるじゃないか、伊之助」

錆兎が言うと、伊之助は両足を開いて腕組みをして得意そうに言った。

「ふん、親分の俺は何事も完璧にできるようになってんだよ」

そう言うが、大股開きは女子らしくない。これをなんとかしないと・・・と炭治郎と錆兎は思ったが、言っただけで伊之助なら世話はない。

「ちよ、ちよっとこれでどうかな？」

廊下で着替えて出てきた善逸が、頭を掻きながらようやく現れた。スカートの前後も間違っていないし、ネクタイもちゃんと結べている。もともと土台が良いから、少し化粧をすれば完璧に女子で通る。

「善逸ちゃんと着れてるぞ！似合ってる！」

「似合ってるって誉め言葉なの？」

そう言われながら、まんざらでもないようで、鏡がないかと探し始めた。そして、すでに女子の制服に着替えている炭治郎と伊之助を見て吹き出した。

「ぶぶっ！お前らも似合ってるよ！伊之助めっちゃ可愛い！」

「な、なんだ！笑いながら言われるとなんか楽しくねーぞ！吉次郎も可愛いぜ！」

伊之助は炭治郎の襟足を掴んで善逸の前に突き出して見せる。すると善逸は一瞬固まり、その表情のまま、無言で炭治郎の両胸をわし掴んだ。

「わっ！」

炭治郎が驚いた声を上げて後ずさるが、善逸は肩を落とした。

「やっぱ無いよなー・・・」

ため息と共に善逸が呟き、その場にへたり込む。急にテンションを落とした善逸を見て二人は焦り、懸命に声掛けを始めた。

「おい勘逸！お前もけっこう女子に見えて可愛いぞ！」

「そ、そうだぞ善逸！お前は可愛いぞ！」

伊之助の励ましを「何か違う」と思いつながらも、炭治郎も乗っかって一緒に声を上げる。

「うるさい・・・俺は本物の女の子がいいんだ・・・ああ彌豆子ちゃん・・・！」

急に彌豆子の事を口にした善逸に焦り、炭治郎は善逸を揺さぶって元気を出させようとした。

靖兎は三人のやりとりを微笑ましく見ていたが、スマホを取り出し、時刻を確認して引き締めた声で言った。

※中略※

女子だらけの華やいだ雰囲気にもまれてか、この一週間の爛れた任務から解放された安堵からか、つい気が緩んでしまっていた。

そのせいで、背後に立たれるまで気づかなかった。強力な霊力を感じて振り返ると、そこには見上げるほどの長身に、スウェット姿でパーカーを被った男がいた。

「・・・誰ですか？」

隠しているつもりでも完全には隠し切れない強力な霊気を感じて、炭治郎は身構えながら誰何する。すると長身の人物は、パーカーを脱いで現れた銀髪の頭を掻きながら答えた。

「宇髄天元。この学校へ調査に来た「柱」だよ」

そう気怠そうに言うが、炭治郎が感じている力の強さは油断できない。

「俺は竈門炭治郎です。何の用ですか？」

「あー？なんだ、随分身構えてるじゃねえか。これでも霊力を抑えてるんだけどな。ああ、同じ術者だからある程度わかっちゃうのか」

宇髄天元と名乗った長身の男は、炭治郎の頬へ急に手を添え、顎から頬の線をやわやわと撫で始める。

「あ、あの、どうして「柱」がここに・・・？」

「されている仕草が猫にするような愛撫に似ていて、炭治郎は少し恥ずかしい思いを感じながらようやく本題に入る。」

「・・・最近、女の失踪事件が多発してるとって知ってるだろ？実は俺の嫁も姿くらましまっさ。今、血眼になって探してるところよ」

「これで妻帯者か。人は見かけによらないものだ。上下ブランドのスウェットで飾り物を付け、パツと見は「やから」と言われても憚らないルーズな姿をしているが、本質は悪くないようだ。」

「俺もその失踪事件の調査に回されました。で、今日この学校に潜入捜査に来たんです」

「潜入捜査ねえ・・・」

「宇髄は炭治郎の制服姿を足の先から頭の髪の毛の先までを一瞥し、意味ありげに笑った。」

「い、印象操作の術で女の子に見えているからいいんです！俺は今日、一人で来ていません！他にも二人、一般人に頼んで一緒に捜査をしているから、この術は必須なんです」

「へえ、一般人と一緒にねえ・・・」

「その瞬間、宇髄の雰囲気が少し変わった。」

「お前は素直すぎるなあ。まだ敵か味方かもわからん相手に、自分の手の内を明かしてどうするんだ」

「言いながら、宇髄の大きな手が炭治郎の赤毛を撫でる。」

「少し乱暴で髪が乱れ、炭治郎は急いで髪を撫でつけて正した。」

「お前、淫鬼喰らいの巫子だろ？噂には聞いていたが、まさかこんな小僧とはなあ・・・」

宇髓は炭治郎から手を放し、困ったように長い銀髪を掻き上げる。

(かっこいいなあ)

馴れ馴れしい態度はいただけでないが、上背は煉獄や義勇より遙かに上で、スラリとした姿に一流モデルで通る顔面だ。

「しようがねえか。お前、こっちに来い」

そう言われて腕を引かれ、炭治郎は抵抗する暇もなく宇髓に校舎の隅の教室へ連れていかれた。

教室はガランとしていて、外の喧騒が嘘のような静寂だ。ここだけ時間ごと置いてけぼりを食らったような静かな教室で、宇髓と二人きりになる。

「柱」の一人だというが、だからと言って敵か味方かわからない。いざとなったら逃げるつもりで、炭治郎は逃避の呪術を密かに編もうとした。

「あー、むりむり。今のお前の実力じゃ逃げられねえよ。俺は味方・・・？まあ、目的が一緒だからそうなるか。というわけで安心しろ」

しかし炭治郎は不信感を拭えない。いきなり人気のない教室に連れてこられて、互いの情報交換でもするのだろうか。

「十二鬼月だが、実はこの近辺に上弦が二人いるんだよ」

衝撃的なことを聞かされ炭治郎の身体に鳥肌が立つ。下弦の鬼でもあれだけ手こずっているというのに、下弦とは比べ物にならない上弦が二人もいるなど、今の炭治郎では対処の仕様がなない。

「でも変なんだよな。この前、一匹の首を切ったんだが、それでも死なねえ。それに、一匹の妖力は下弦程度の妖力しか感じられなかったんだよ」

「え・・・それってどういうことですか？」

「もしかすると、二匹で一匹の鬼かもしれねえ。一匹の鬼は俺が抑えてるが、もう一匹がどうしても見つからん。お前、覚えあるか？」

炭治郎は考え込んだが、思い当たるフシはない。しかし、この一週間で通った風俗店で、微かに高位な鬼の気配を何度か感じたことがあった。

そのことを宇髄に告げると、しばらく腕組みをして考え込んでいたが、急に閉じていた目をパツと開き、炭治郎を見下ろして言った。

「お前、風俗嬢やってんの？」

正面向かれて事実を突きつけられると、やはり羞恥と背徳感がどうしようもなく湧き上がってくる。

「う・・・印象操作で・・・女性に見えるようにして・・・」

「ばっか。それだけじゃ客とくつついてイチャイチャする仕事なんてできねーだろうが。巫子はアソコを自由自在に変えられるのか？」

「なっ・・・！」

そんなことない、と炭治郎が驚いて首を左右に振り、とりあえず悦疼女の事を話して身体の触れ合いはクリアしている旨を告げたが、宇髄の炭治郎を見る視線がどうも疑わしい。

そして何を思ったのか、宇髄はキチンと並べられた机を掴んで動かし、三つほど連携させてみせた。

「よし、これからお前を抱くぞ」

唐突な宇髓の言葉に、炭治郎は我が耳を疑った。

「……え……?」

「前々から興味があつたんだよなー、淫鬼喰らいの巫子。その身体は極上なんだろう? ぜひ一度お相手してもらいたいねえ」

少し好色そうな笑みを浮かべ、視線を投げかけてくる宇髓に、炭治郎は顔を羞恥と怒りで朱くして詰め寄った。

「俺が巫子だからって抱かれなければいけない理由はありません! それに、奥さんがいるんでしょ? 不貞ですよ! 俺は嫌です!」

「なあに、嫁は三人いるんだ。全員そういう方面には寛容だから、お前が心配することじゃねえ」
また炭治郎の赤毛に大きな手を置いて、髪をグシャグシャと掻き乱す。

炭治郎はその手を払って、明らかに敵意剥き出しで宇髓を睨んだ。

「宇髓さんいい加減にしてください! 大体どういう役職でここに潜入してるんですか!」

「ああ、俺はこの学校に美術教師として派遣されてきて……」

「先生が不貞ですか! あきれますよ! ……わっ!」

喚く炭治郎だったが、急に宇髓に横抱きをされて驚きと共に言葉を切った。

「教師はあくまで表の顔。裏は鬼退治の桃太郎。俺に貞操観念うんぬんは噴飯ものだぞ」

そう言うと、宇髓は並べた机の上に炭治郎を横たえて、仰向けにさせてその両首を掴み頭の左右に縫い付けた。

炭治郎が抗議の声を上げるより早く、宇髓が炭治郎の十センチ以内にまで迫ってくる。

(本当に端正な顔だな・・・)

「柱」って顔試験もあるのかな？と思わずにはいられないほど、これまで炭治郎が出会った「柱」たちは眉目秀麗だ。

「それにお前、靈気の循環が乱れてるな。精気の補充はしてるようだが、偏ってる。これワリと辛いんじゃないかね？」

宇髓に言われるまでもなく、炭治郎は自分の身体が不均衡になっていることはわかっていた。

男の精を貰えない睦合いと、悦疼女の浄化、帰宅して注がれる妖気。鑄鬼の妖気は上等なものだが、任務で渴望した身体が、様々な種類の精を受ける機会がありながらお預けを食らって、悲鳴を上げている。

「だからって、あなたに抱かれる筋合いはありません！俺は嫌ですよ！」

それでも語気を強めて反対する炭治郎に、不意に宇髓が手を差し伸べ、炭治郎の耳の下あたりに片手を触れさせる。

(えっ・・・?)

その途端身体の中が淫靡に濡れる感触を感じ、炭治郎の顔は紅潮して身体も熱くなってきた。

炭治郎のわかりやすい変化を見て、宇髓がいたずらっぽい笑みを浮かべる。

「相変わらず即効性で効いてくるな。悪イけど、媚薬押し込んだからこれから身体が疼いてくるぜ？」

(な、なんて人だ！)

炭治郎は宇髓の行為に対して更に憤り、この人の思い通りになんかなるものか、と歯を食い縛るが、身体中が淫熱に炙られ始めて、上から覆い被さる圧倒的な雄の匂いに頭がクラクラしてしまう。

この一週間で普通の人間に抱かれるのに慣れてしまっている炭治郎の身体は、目の前の極上の男子の身体の体温とその体臭を嗅いでしまって、すでに発情してしまっている。

「なんで・・・抱くんですか・・・」

吐息が荒くならないように小さめの声で炭治郎が堪えると、宇髓は小さく笑って言った。

「そりゃあ、目の前に淫鬼喰らいの巫子様がいるんだぜ？淫鬼も瞬殺っていうその身体、抱いてみたいじゃねえか？」

(嘘の匂いがする・・・)

宇髓の上機嫌な口調とは裏腹に、何か胸に含んだものがある。

(もしや敵・・・?)

炭治郎は訝しがったが、宇髓が炭治郎に対して敵意が無いのは匂いと雰囲気でわかる。何らかの術を施すために、炭治郎をこれから抱くというのだろうか。

宇髓の魂胆はわからないが、とにかく今の炭治郎の身体は発情しきってしまったている。気づきたくないが、下半身から淫蜜が分泌され、腰の奥がジン、と熱い。

「んぐっ・・・」

炭治郎がもたもたしている間に、突然口づけをされた。口の中に舌を挿れられる寸前で振り切り、宇髄を睨みつける。

「一体、何の目的でこんなことをするんですか……俺はあなたが信用できません！」
怒る炭治郎とは裏腹に、宇髄は口に軽く笑みを浮かべて余裕の表情だ。

「お前……目エでつかいなあ……キラキラして、本当に赫いんだな」

「話をはぐらかさないでください！」

相手にされない理不尽に炭治郎がさらに声を上げる。宇髄は再び炭治郎に口づけをしようとしたが、首を逸らせてキスから逃れた。しかし、代わりに首を舐められる。

「ひえ……」

そろそろ本格的に欲情し始めた身体に、この刺激は強かった。

「や、止めてください、本気で抵抗しますよ……！」

語気を強めて炭治郎は言い放ったが、下半身に走った快感で強気が霧散させられる。

「スカート押し上げてるぞ。身体は正直だねえ」

炭治郎の雛先が反応し、紺色のスカートの一部が盛り上がって布を引き上げていた。それだけでも恥ずかしいのに、犯される相手に指摘されて、炭治郎はいたたまれない気持ちになる。

「こ、これは、媚薬のせいです！本当に止めてください、あぁっ、ちよっと……！」

宇髄の膝が炭治郎の雛先に押し当てられ、そのままゆるゆると上下に擦られる。電流のように甘い感覚が腰から脳天を駆け巡り、ついその快楽に意識を委ねてしまう。

「んんっ・・・！」

膝が擦れる度にゾクゾクと背筋に快感が走り、息が詰まってくる。閉じていた両足も少しずつ左右に開き始め、男の愛撫をもっと受け入れようと、身体が勝手に動いてしまう。

「や、やめて、くだ、さい・・・！」

「そんな顔で言われてもねえ・・・顔真っ赤で目ユウユウるじゃねえか。お前なかなか可愛いな」嬉しくもない賛辞を掛けられ、首元に舌を這わされる。二か所同時に責められると快樂のコントロールが難しくなる炭治郎の身体は、すでに淫欲が昂って宇髓を受け入れようと脈動し始めている。

左手を離されて片手が自由になり、炭治郎はすかさず宇髓の肩を押しつけようとするが、岩のように頑丈でびくともしない。

「うっ・・・くそっ・・・！」

「ほらほら、女の子が「くそ」なんて言っちゃだめだろうが」

宇髓の手がスカートの上から雛先を撫で回し、じれったい快感に腰がゾクゾクと甘く痺れてしまう。スカートの上からの愛撫は、炭治郎に羞恥と屈辱を感じさせた。

「や、やめてください、それ・・・っ」

「反応しといてそれはねーだろ。派手に欲情しやがって・・・」

そのまま炭治郎のスカートを掴み、足の付け根の際どい部分まで捲り上げる。下から現れた、白靴下を履いた太腿の生足が色っぽい。そのまま腰の上まで大胆にスカートの前を持ち上げられ、下半身を晒されてしまう。

「今どき禪かよ・・・ほら、もう濡れてるじゃねか」

大きくて分厚い宇髓の手に雛先を布ごと鷺掴みされ、炭治郎の身体が跳ね上がる。

「うあつ！あ、いやだつ・・・！」

しかし身体の神経は全て触れられる雛先に集中し、どうやっても気を逸らせることができない。そのまま禪ごとヌルヌルと雛先を愛撫され、炭治郎の身体からどンドン力が抜けてゆく。

「あぐつ・・・！あ、あつあ・・・！」

炭治郎の声に濡れた響きが混ざってきたのを耳にし、宇髓は小さく笑ってさらに手の動きを速めてやる。淫液を含んだ濡れた下着が雛先に擦れ、その繊維の編目までわかるほど敏感になっっている性感帯には悦が強すぎる。

「んっ・・・！あ、だ、だめ、我慢できないっ・・・！」

「我慢なんてすんな。このまま気持ちよくなっただいぞ」

炭治郎の唇を舌で舐めながら、必死の訴えを無視して宇髓は絶頂を促した。

「うあつ・・・あつ！あああつ・・・！」

炭治郎の左手が宇髓の右肩の服を掴み、強く引つ張ると同時に炭治郎は射精絶頂を迎えた。

宇髓の手の動きは巧みで、性技に長けた義勇のそれと比べても遜色ないほどだ。色事にも通じているらしい謎の多い「柱」だが、炭治郎の疑問は絶頂の快感で蕩け、熱い吐息に変わる。

「はあ、はあ、はあ・・・」

「気持ちよく出たか？よーしいい子だ。じゃあ、次はこっちだな」

一瞬で下着を剥ぎ取られ、下半身を裸にすると、宇髄は炭治郎の精液を溜めた右手で秘孔に触れてきた。「いっ……！あ、い、嫌です、やめて……！」

「その割には気持ち良さそうじゃねえか。声が。それにしてもすげえ匂いだな。媚薬仕込んでんのはどっちだよ」

(匂い……?)

香りを指摘されて炭治郎は一昨日の義勇の言葉を思い出した。

『お前の匂いに似てる』

(お、俺は匂いなんて……)

嗅覚が卓越して発達した炭治郎だが、自分の匂いだけはわからない。炭治郎は欲情すると、相手を誘う官能の華の香りが身体から漂うが、嗅いだことがないので本人は無自覚だ。

いつの間にか左足を肩に掛けられて腰を立たされ、宇髄の好きなようにされてしまう。そのまま指を胎内に挿れられ、炭治郎の中で熱い官能が突き抜けた。

「んぐうううっ……！」

首をブルブル震わせて顎を仰げ反らせ、はあはあと喘ぎ、炭治郎は快楽に耐える。宇髄はそんな炭治郎の様子を面白そうに見下ろし、長い指を使って胎内を自由に暴いてゆく。

「ふあっ！あ、ああっ！や、やめろ、んんっ！も、もう抜いて、あっ！あっ！ああああああっ！」

炭治郎の身体を知り尽くしているかのように、宇髄の指は快楽の点を突いて動いてくる。快楽の興に乗って、炭治郎の身体が汗ばみ始めて、肌がさらなる愉悦を欲して脈動する。

「嫌ヨ嫌ヨも・・・ほんと言葉通りだ。おもしろいねえ。ほら、一回イツとけ」

「あ、あ、ああああつ！」

前立腺の裏をいきなり激しく捏ね回され、一気に快樂の水位が上がり、容器から零れ落ちて限界を迎える。

「ああああああつ・・・！」

甘い達悅の声を上げて背中をヒクつかせ、炭治郎は絶頂に流されて何も考えられなくなった。身体で受ける快樂には慣れていないはずなのに、何故かおぞましいほどに心地よい。

「はっ・・・ああ、あつ、ああ・・・っ」

はひはひ、と息を継ぐ炭治郎の絶頂顔を見下ろし、宇髓が炭治郎の顔中に舌を這わせてくる。

「かーわい・・・」

そう言っておどけるが、下から見上げた宇髓が完全に男の目をしていて、炭治郎は観念した。

その目は「これから真剣に抱く」という男の真摯な眼差しだった。これまで一体何人にこの目を向けられてきただろうか、これを向けられると炭治郎は何故か逆らえない。

「嘘だろうと思ってたけど、マジで濡れるとはな・・・こりゃ愉しめそうだ・・・」

炭治郎の秘孔から流れ出た淫蜜を指に絡め、さらに胎を抉られ、快感に下半身が痺れる。

「んぐっ、はあ、ああ・・・っ」

「よしよし、身体の力抜け・・・」

炭治郎から逃げる気配が無くなったのを感じ取ったのか、押さえていた片手も解放して両手で炭治郎の両足の膝を抱える。

「んんっ……！」

秘孔に熱い男の肉棒が押し当てられるのを感じ、炭治郎の身体が勝手に喉を鳴らしている。

「うぐっ……！ああ、あああ……っ！」

※中略※

下着越しに下半身を下から上に撫で上げられ、ぞくん、と背中に愉悦が走る。しかも触手は一本だけではなく、二本、三本と増えて下着越しに雛先を撫で上げてゆくのだ。

「うあっ！あっ！」

（だ、だめだ！集中できない！せめて足を閉じられないのか……！）

左右に螺旋状に絡みついた触手は、足を大きく開かせて無遠慮にスカートの中へと群がってくる。雛先だけでなく、臀部や鼠径部にも触手の先端はおよび、感じやすい炭治郎に次々と快感を流し込んでくる。

スカートの中に入り込んだ触手は炭治郎の穿いている下着にかかった。

禪を燃やしてしまつて結局宇髄が持ってきたショーツを身に着けるしか術がなかったが、連日の風俗嬢になる捜査で若干女性の下着への抵抗は少なかったものの、こんな過激な装用のものを穿くのは勇気が必要だった。

フリルのついたブルーの小さな下着に、左右が紐で括られて辛うじて腰骨に引つ掛かっているようなショーツだったが、触手がその上から炭治郎の桃尻を撫で回し、反応して布を引っ張っている雛先に群がって

くる。ショーツの間に細い触手が入り込み、双丘の間を探ろうと伸ばし、その感覚に炭治郎の背中がビク、と反応する。ショーツ越しに雛先を撫で回されて、ブルーの布が濡れてゆく。体液が染み出したことに味を占めたのか、鼠径部からショーツに潜り込んで、極細の触手で雛先を探り始める。

「んぐっ・・・うっ・・・うあぁ・・・」

必死に腰を振って触手から逃れようとするが、身体全体を拘束されているため、その程度では当然触手から逃れることはできない。ショーツの布がビビシと引つ張られ、擦れる濡れた布の感覚が鈴口を刺激し、生唾が溢れる快感が下半身を走る。ショーツが生温かく濡れ広がる感覚に羞恥を覚えながら、炭治郎は必死に抵抗を試みる。

布越しに触れてもらちが明かないと気づいたららしい触手が、器用に左の腰ひもを外し、ペろ、と半分を露にさせてしまう。

「うあぁあぁっ！こ、この変態しよくしゅ・・・んぐっ！」

炭治郎が顔を赤らめて叫ぼうとすると、大口を開けたそこへ触手が入り込んできた。ぬるぬるとしてこんにやくのような質感の触手は歯で噛み切ることもできず、炭治郎は困惑する。やがて触手の先端から甘い粘液が噴き出され、本能的にこれは嚥下してはいけないと炭治郎は察知したが、口の粘膜に触れてしまっただけで、もうその効果は絶大だった。

炭治郎の身体は一気に淫熱に炙られ、身体中の性感帯に触れて欲しくて仕方なくなり、涙が出るほど切なくなる。

両足に巻き付かれている触手の感覚にすら愉悦を覚え、身体がガクガクと震えて身体から薫る汗がしつとりと滲み、下半身が勝手に濡れる。

(ううっ、催淫剤か・・・中和しないと、こいつらのいいようにされてしまう・・・！)

淫を行使して退魔を成す炭治郎の身体は、人間のハーブや薬、淫鬼の媚薬に対して驚くほど耐性が弱い。通常の間が一と感じるのを、炭治郎はその三倍も四倍も強く感じてしまう。

淫鬼喰らいの巫子として身体を改造されたその結果でもあったが、炭治郎は時折自分の身体が忌々しく感じる。

それよりも、早く宇髄からしこたま撃ち込まれた精気を使って、身体の熱を浄化しなくてはならない。

炭治郎はスカートだけでなく、シャツの間からぬるりと潜り込んでくる触手の感覚に耐えながら、目をつぶって宇髄の精気を意識する。

(あれ？な、無い！まさか、どうして・・・！)

柱である宇髄にあれほど強力な精気を何度も注がれたというのに、身体には一向にその残滓がない。日暮れまで宇髄に抱かれていたのは幻だったのか。

確かに射精の瞬間、灼け付くほどの熱と圧倒的な霊気の量を感じたというのに、それがないのはおかしい。炭治郎が善逸と入れ替わったのも、実は宇髄の精気を十分受け取った自負で、これを用いればなんとかなるだろう、と高を括った慢心もあった。

だが、いくら身体を探っても宇髄の精気は感じられない。

(だ、だめだ、このままじゃ触手たちの好いように・・・周りの人たちも助けないといけないのに・・・！)

炭治郎は己の無力に歯噛みするが、今は後悔するべきときではないと気持ちを切り替え、なんとか脱出口の霊扉を編もうとする。

「ふあっ！や、やめろ、触るなっ……！」

しかし炭治郎を捕えた触手が大人しくすることなどありえず、そのぬるつく身で、炭治郎の肌を舐め回しにくる。

「あっ！やっ！いやだ、やめろ！」

片方だけ引っ掛かっていたショーツの紐も解かれ、炭治郎の太腿にとどまって秘めた部分が全て曝け出されてしまう。

スカートの後ろを派手に捲り上げられ、美尻を露にされると、何本もの触手たちがその双丘の間を下から上にぺろぺろと撫で始める。

「んぐっ！んっ！んんんっ！」

それだけで達悦の予感が迫るほど、炭治郎の身体は感じやすくなって、撫でられる度に良い反応を示す獲物に気分を良くしたのか、触手たちの数は増える。

「うあ……！そこ、だめ……！」

双丘の間を通過して種玉を摩擦し、その先の雛先にも触手が及んでくる。しかし、触手の責めはそれだけにとどまらず、スカートの前を押し上げている雛先に、スカートごと巻き付いて抜き上げ始めた。

「っ……！あ、ああああっ！あ、ああ……っ！」

硬い生地をした女子制服のスカートの布で摩擦され、そのザラザラとした感覚と遠慮のない硬い布の質感が雛先を弄ぶ。

「い、いやだ、やめろ、こ、こんな……！」

(恥ずかしい……！)

誰も炭治郎の乱れた姿を見る者はいないが、こんな屈辱的な責めをされては炭治郎も羞恥を禁じ得ない。スカート越しに雛先を責めてくる触手の動きはどんどん激しくなり、布のザラザラを使って鈴口を擦った、全体を包み込んで上下に激しく扱いたり、獲物を颯るのに長けた手管で炭治郎を追い詰めていった。媚薬の効果もあり、身体はどんどん熱を帯びて炭治郎も快楽の我慢が限界に達する。荒い目の布でガサガサと上下に擦られ、普通の手指では得られない快感に腰が痺れてしまう。

「あつ……あつ……あつ……！」

厚手のスカートの液体の染みが広がり、炭治郎は不覚にも射精絶頂を迎えてしまった。

炭治郎が絶頂を迎えたのを待っていたかのように、触手たちは炭治郎の身体に群れかかった。周囲で女性を凌辱していた触手も集まってきている。

どうやら、女性よりも体液を多量に搾り取れて、さらに上等の靈気を持った炭治郎に目を付けてきたらしい。

身体中に触手が纏わりつき、白シャツを乱暴に左右へ引っ張られてボタンが弾け飛ぶ。現れた瑞々しい素肌に粘液を纏った触手が入り込み、媚薬で性感を底上げされた炭治郎の肌の上を、容赦なく滑り回る。

(ど、どうにかしないと、このままだとされっぱなしになってしまう……！)

しかし炭治郎の今の陽気の量では、周囲の触手全体を浄化できるほどの容量は持っていない。頼みは、善逸と伊之助に頼んだ宇髄だが、それも完全には頼りにはならない。

破られたスカートの隙間へと触手が群がり、桃尻をぺろぺろと幾本も舐め回し、双丘の間の秘孔の入口に触れられると、身体が小さく跳ねるほどの感覚が走った。

うなじにも人間の舌と似た感覚の触手が触れ、頭のとっぺんまでゾゾ、と、得も言われぬ感覚が走る。肌をなぞる触手の感覚に、気持ち悪さよりも快感を拾ってしまうようになり、炭治郎の身体がどどん情欲に開いてゆく。

「はあ・・・はあ、ああっ・・・！」

炭治郎の身体が汗ばみ始め、体液を摂取しようと触手たちはいよいよ活発に動き出す。

首元や胸、脇腹に滑り込み、淫蜜を垂らし始めた秘孔を交互に舐め上げ、雛先には直接巻き付かれて上下に扱かれ、先端を触手の先端で上下にぬるぬると舐められている。

「んぐっ・・・！ああああっ・・・！」

両手は左右に広げて拘束され、膝立ちの姿勢で炭治郎は快感に仰け反る。

炭治郎の赫い目が煌めき、痣の形が変わって、身体が本格的に発情の兆候を見せてしまう。

（だ、だめだ、こんな奴らに流されたらいけない・・・！早く、周りの人たちも助けないと・・・！）

炭治郎は生唾を飲み込み、破邪の祝詞と唱えようとするが、口を開けるとすぐに触手が侵入してくる。無意識に首を捻って逃れようとしたが、群がった触手に捕えられて一本を喉の入口まで迎えてしまう。

「んぐっ！うっ！んんっ・・・ん、ぐくっ・・・！」

今度は甘い媚薬を大量に飲まされて、身体が一気に熱を持って淫欲が深くなる。

臀部を舐め回していた触手が秘孔に先端を挿入し、淫蜜が零れて炭治郎の身体から相手を誘う華の香りが漂い始めた。

(し、しつかりしろ！こんな得体の知れない物に触られて感じるなんて、屈辱だ！)

しかし、表面は柔らかいが芯の硬い一本の触手がゆっくりと濡れた秘孔へと侵入し、胎内から炭治郎を熱くさせる。

「んぐっ・・・あああああっ！」

その触手の感覚は男の肉棒に似ていて、炭治郎は凌辱感をますます感じて屈辱を覚える。しかし、雛先を数本の触手でぬるぬると撫で回され、腰が蕩けそうな愉悦が止まらない。

下半身の刺激だけでも十分感じているのに、いつ学習したのか、感じやすい胸の桜色にも触手の先端が上下に激しく摩擦する。

(か、感じるな！我慢しろ、なんとか脱出して周囲の人を助けないと・・・！)

媚薬を飲まされ、淫熱に炙られながら、炭治郎は意識を保とうと奮起するが、身体で感じる快感はとて無視できるものではない。

全身に繊毛を生えさせたブラシ触手が背後から炭治郎に迫り、双丘に触れてきた。挿入されるかと危惧したが、触手は双丘の間を通過し、両足の間を通って会陰を通り、雛先を下から上へと擦った。

「っ！」

下半身の感じる部分全てを一気に摩擦刺激され、炭治郎の身体が縦に揺れる。背中が大きく仰け反らされ、感じた愉悅の大きさを思わせた。

さらに男の肉棒の感触によく似た触手が先端を胎内に挿入させ、炭治郎に我慢することを許さない。

「あつあつ・・・！」

※中略※

人間の使うドラッグなど比べ物にならない。無惨の陰気は、ここまで強力なのだ。炭治郎は痛感させられた。

「ほらほら、一回じゃ終わらないぜ？まだまだ射精してもらわねえとなあ・・・」

タレ目の男は再びピンクの筒を握り締めると、達悦したばかりで恐ろしく敏感になっている炭治郎の雛先へ、遠慮なく上下摩擦を加えてゆく。

「あああああつ！あつ！い、今は、だめだ、んんんっ！はあ、ああああつ！感じっ・・・すぎっ・・・！」

「いいじゃねえか、とことんまで感じて、気持ちよくなっちまえ！」

今度は二分と持たずに炭治郎は射精絶頂を迎えた。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

額に汗を浮き上がらせ、炭治郎が燃えるような吐息をつく。しかし、男の手の動きは止まらない。

「い、いや、無理、だめ、やめろっ・・・！感じすぎて、辛いんだ・・・！」

「何言つてやがる。お前のチンポは悦んで反応してるぜ！」
ピンクの性具の中で、ぬるぬるコリコリと揉みくちやにされ、炭治郎は抗えない快感に流されるままになつてしまい、再び間断なく白液を吐き出してしまふ。

「あああ———！！」

身体がビクビクと激しく痙攣し、拘束している鎖がジャラジャラと金属の音を立てる。
ようやくタレ目の男が炭治郎を筒から解放したが、筒の中は炭治郎の精液で溢れ返り、その入り口から白液が垂れる様が淫靡だった。

「随分気持ち良さそうだったな。ほら、中からこんなに精液が垂れて来るぜ……？」
男は筒から滴る白液を炭治郎に見せつけ、その胸元に一滴二滴と垂れる様子に、炭治郎は激しい羞恥を覚える。

「み、みせるなっ……！」

「あれ？てめえで出した子種だぜ？責任もって、全部飲むぐらいはしねえといけないんじゃないやねえの？」
手にした筒を握り締めて、ジェルと白液の混合液を炭治郎の顔へさらに垂らす。

嫌悪に炭治郎は首を左右に振り、白液の飛沫を撒き散らした。

「いきなりオナホは強烈だったか？じゃあ、俺が直々にカイトやるよ」

そう言う男は段ボールの中から、白い大きな手袋を取り出した。それは手袋というよりはミトンの形をしていて、内側に不規則な突起が並んでいる。うねった線状のものや、大小の粒が生え揃っているが、一見したところではグロテスクさはない。

ローションを取り出して男はミトンにたっぷり垂れ流すと、炭治郎に向かって言った。

「見た目は大したことなさそうだけどな、これが結構気持ちいいんだぜ？」

男は炭治郎の両足の間に座ると、そのミトンで少し反応を残している雛先を握り締めた。

「んんっ・・・！」

ゾクツと背筋に快感が走り、炭治郎が呻き声を上げる。ぬるつく感覚に、突起の感触が敏感な表面に当たって、握られただけで愉悦が走る。

(この鬼、いつまで続ける気だ?)

炭治郎は先を考えたが、まだ囚われて間もないことを考えると杞憂が襲ってくる。しかも、この部屋には時空結界が張られていて、炭治郎と男の空間は時間が止まったままだ。例え数日ここで嬲られたとしても、結界が解かれれば元の時間軸に戻り、結界が張られる直前にまで戻るだけで、炭治郎のダメージだけが残る。

「ほらほら、考え事か?これから極上を味わわせてやるよ」

すると男はミトン越しに雛先を握り締め、ローションのぬめりをたっぷり使って上下の摩擦運動を始めた。

「う、あつ!あつあつ!あああつ!や、やめろ!あああつ!」

先程の筒とは違い、人の手で扱かれているという屈辱感が伴いながら、筒に負けない快感がせり上がってくる。粒の突起や線状の突起がよい具合に表面を摩擦し、上下の動きが加わって、腰が痺れる激悦が訪れる。

「あつ!あつ!あああつ!や、やめ、はああつ!あつ!あああつ!」

ぐちゅぐちゅとローションを泡立たせながら、男は激しく上下に擦って炭治郎を責める。男の握り具合も丁度よく、淫具との同時責めに炭治郎は耐えられない。すぐに絶頂感がせり上がり、我慢しようと炭治郎は意識を逸らそうとしたが、さらに激しく扱かれてたちまち射精絶頂を迎えてしまった。

「っ——！！」

ビクビクと身体を痙攣させ、雛先の先端から白液を吐き出し、堪らない快感に目の前が白くなる。

「もう出しちまったのか？しょうがねえな・・・まだまだこれからだっのに・・・」

気色悪くタレ目の男が笑みを浮かべると、射精したばかりだというのに、それを無視してミトンを激しく上下に動かした。

「んぐううっ！い、いや、あああっ！あっ！っ・・・！ふあっ・・・！」

首を振って嫌悪を示す炭治郎だが、そんな意識も塗り潰してしまうほどの愉悦が湧き上がり、続けざまに射精絶頂を放つ。

「んん——！！」

少し自由になる両膝を暴れさせて、炭治郎が鎖を鳴らしながら激しく暴れ回る。身体の全神経が雛先に集中し、快樂以外のことを考えることができない。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

流石に間断なく射精絶頂を強いられ、炭治郎が荒息で全身を汗に濡らして疲弊の色を浮かべる。必死の様子な炭治郎の頭を撫でて、タレ目の男は笑って舌を伸ばし、その頬を舐める。

「可愛いなあ・・・色っぽいなあ、綺麗だなあ・・・全部羨ましい、妬ましいぜ・・・この可愛さで、これまで散々いい目にあつてきたんだらうなあ」

呪詛のように男は炭治郎に話しかけるが、それは違う、と炭治郎は反論しなかった。

自分は容姿で得をしたことなどない。いつもこの赤毛と額の痣で見る者を竦ませ、恐れと軽蔑の視線を何度となく浴びせられてきた。

よく見ると相当な美少年である炭治郎だが、最初にその印象を持った者は炭治郎に注視しない。

学園では印象操作をかけているから同年代の男女に騒がれることなく、至って普通に暮らしている。

炭治郎の底抜けの明るさと優しさで好意を持つてくれる人たちはいるが、容姿は関係なかった。

目の前のタレ目の男に反論しなかったが、快樂が先に立って言葉を紡ぐ隙すらない。

「ほらほら、こんな気持ちの悪い男にチンポ弄られて悔しいだろう？巫子ちゃんはすぐイクからなあ」

「んっ！あああっ！」

男は手を更に上下に動かし、炭治郎に快樂を強制する。一擦りごとに絶頂感がせり上がり、快樂のことしか考えられなくなってしまう。グチグチとローションの泡立つ音が部屋に響き、それに炭治郎の喘ぎ声に加わって、周囲を一層淫靡な雰囲気にかけていた。

（く、悔しい、こんなヤツに・・・！が、我慢・・・）

しかし先端を掴み込まれ、握ね回された瞬間、炭治郎の腰の奥に甘い衝撃が走り、その直後、達してしまっていた。

「ああああっ！」

しかし嘔き上がったのは白液ではなく、透明の液体だった。だが勢いは凄く、男が避けなければ顔面を打つていたであろう噴出だった。

「はははあ、とうとう潮吹きちゃったか？すげえエロいぜ。気持ちいいんだって？これ？」

男が唾うが、炭治郎は潮吹ききの絶悦の直後で思考が朦朧とし、反論の言葉すら浮かばない。未だに余韻があつて、はあはあと喘ぐだけしかできない。

男はそれでも炭治郎の雛先を責めるのをやめず、根元から先端にかけて擦ったり、左右に捻って撫で回したり、先端に手を覆い被せ、グチグチと音を立て、快感を途絶えさせない。

「ああっ！も、もう嫌だ！んああっ！あっ！あああっあああっ！」

少し時間をかけて弄ばれて、絶頂の度合いも強くなる。今度は透明の淫液ではなく、白液が吐き出された。しかし、勢いは弱い。

「んー、まだ無惨様の陰気が馴染んでないのか？この程度でこれだけの精液の量じゃ、まだまだだな。しようがねえ、こんどはこつちを可愛がるか」

男は段ボールからまた怪しげな物体を取り出し、その淫具にたっぷりローションをまぶしてゆく。

「あつ、そうだ、先にこつちやらねえといけねえだった」

手をポンと打って、タレ目の男は自分の手順の間違いに気づく。なんにしろ、炭治郎からすればいい加減に解放してほしかった。男はミトンを脱いで、自分の手にローションを塗りつけ、炭治郎に迫る。両足の間に通された鉄パイプが上げられ、天井から吊るされていたフックに引っ掛けられて、炭治郎の下半身が

浮き上がる。秘めた部分が丸見えになる恥ずべき姿勢に、炭治郎は屈辱と羞恥を感じながら、未だに身体を渦巻く淫熱に息をフウフウと吐き続ける。

「可愛いケツだなあ・・・昔に比べて肉付きもよくなって、ほんとますます色っぽくなったな。へへ、すべすべだ・・・」

炭治郎の露になった臀部を撫で回し、男は楽し気に笑う。

「くそ、触るなっ・・・!」

背中にゾクゾクと快楽を感じながら、それでも炭治郎は気丈に反抗の言葉を投げかける。

「こっちの具合もよくなってるのかな?」

そう言うと、男の野太い指が双丘の間にある秘孔に一本突き挿れ、内壁をぐりぐりと回転で抉る。

「んんっ! あっ・・・! や、やめ、ろっ・・・!」

ビリビリと電流のような快楽が流れ込み、炭治郎は上ずった声で言うが、これまでの責めで身体はすでに雄を迎える準備ができていて、タレ目の男の指を心地よく締め付け、淫蜜がとろとろと溢れてしまう。

「良い匂いだなあ・・・巫子ちゃんは相変わらずここが濡れるんだな。くくっ、女の愛液と比べ物にならねえぐらい量が多いなあ。エッチだなあ」

「あっ・・・! か、嗅ぐなあ! ふああっ・・・!」

指をもう一本増やされて内壁を擦られ、ゾクンゾクンと快楽の波が間断なく襲ってくる。

「巫子ちゃんを感じる部分が広いからなあ。指よりもチンポで擦ったほうが善がってたなあ。今はどうだ? 相変わらず啞え込んでるのか?」

(こ、こいつっ・・・!)

下品な言い方で貶められて、炭治郎の胸に一瞬怒りが立つ。しかし、大きな指で性感帯を容赦なく摩擦されて快感に声が詰まってしまう。

「あっ! あああっ!」

炭治郎の声が甘く変わり、それを当てた男は厭らしく嗤って、指を引き抜いた。そして、ローションを塗りっぱなしで放置していた淫具に手をかけ、炭治郎に見せつける。

「うっ・・・ま、また何かする気か・・・!」

その淫具は奇妙な形のシリコン棒だった。少し曲線を描いた十数センチの滑らかな棒の根元左右に、上下を向いた巻き型のシリコンが付いている。

「これはエネマグラって言うんだ。知ってるか? ああ、巫子ちゃんこころへんで働いてたんだっけ? エロいから、身体が疼いて男を食いに来てたのか?」

「なっ・・・」

炭治郎が「何故知っている」と言う前にタレ目の男は続ける。

「俺はこのあたりで雇われてたんだよ。まあ、用心棒みたいなもんか。最近べらぼうに可愛い子が入ったって聞いて写真見せてもらったら、巫子ちゃんだったからびっくりしたぜ」

しばしば歓楽街で感じていた強力な淫鬼の気配はこの男のものだったのか。炭治郎は納得したが、だからと言って今のこの状況を打破できるわけではない。

「もう慣れてつかないかな？でもいいか。今の巫子ちゃんは特別感じやすいから、結構効果あるだろう。ほれ、挿入だ・・・」

「っああああっ！」

ローションと淫蜜でひたひたになった炭治郎の秘孔に、奇妙な形の淫具が挿入されてゆく。ズブズブと挿ってゆく感覚にゾクゾクと満たされるような感覚が広がり、口元が緩んで生唾が零れそうになる。

しかし淫具は途中で止まり、底にある上下に伸びたシリコン曲線が会陰と双丘の間にはまった。最奥を突くまでの長さはない。

（な、なんだ？これで終わりなのか？それとも、これまでの修行で感じなくなっただろうか・・・？）

無惨の陰気を取り入れて強制発情状態にいる自分が、後者なわけではないだろうが、挿入された瞬間は圧迫感はあるものの、それ以外の感覚はない。

「な、なんだこれ！抜け！気持ち悪い！」

「なんだ、これの効果がまだわからねえか？ちよーっと時間かかるかな？まあ、巫子ちゃんだっただらすぐだろうけれど」

くっくっ、と男は醜く嗤い、炭治郎の様子の変化をソファに座って眺め始める。

（何がどうなるんだ・・・一体・・・ん？）

炭治郎が息を吸うと、中のエネマグラがずるりと胎内で動き、性感帯の前立腺を強く刺激してきた。

「あっ・・・！」

予想外の強烈な悦に炭治郎は声を上げるが、息を吐くとまたエネマは下がり、吸うとまた上がってくる。

(ま、まさか・・・これが繰り返されるのか?)

炭治郎の嫌な予感はずた。息をする度、吸う度に吐く度に、中でエネマグラが上下に動き、性感帯を容赦なく擦ってくる。

「んっ、んんっ! あっあっ! ああっ! はあああっ! ああああっ!」

性感帯の前立腺だけを集中的に責める淫具の動きで、すぐに絶頂が押し寄せて、炭治郎が艶声を上げる。

「おお、イツたか? まだまだこれからだぜ、巫子ちゃん。がんばんな・・・」

さらに醜く嗤うと、スマホを取り出して立ち上がり、身悶える炭治郎に向けて動画を録り始める。

「やめろ、やめろやめろ・・・」

※中略※

「っ・・・! はあ、き、気持ち、いいっ・・・です・・・!」

連続絶頂の峻烈な快感を思い出して、炭治郎は慌てて男に刷り込まれた言葉を口にする。もう「屈辱的」などと言う感情は押し込められ、ただ身体で感じる快感をいかに軽減するか、ということしか考えることができない。何故軽減することを考えなければいけないのか、それすらももう思い出せない。

「んっ、ぐっ・・・うう・・・っ!」

シビアンの後方部分はカバーが外れるようになっていて、そこを取ると断面になる。炭治郎の秘孔を貫いている淫具をシビアンに取り付けられ、炭治郎はいよいよ快感地獄から逃げられなくなってしまった。ディルドはずっと最奥を押し付けていて、結腸と無惨の結界がある快楽の弱点部分を容赦なく刺激している。しかもディルドには無惨の陰気が塗りつけられていて、それが共鳴しているのか、胎で感じる温度が酷く熱い。

(こ、これで激しく動かれるのか・・・？む、無理だ、意識が持たない・・・！)
ぞくぞくと背骨に快楽の電流を流し込まれながら、炭治郎の頭がまた真っ白になる。ゴリゴリと最奥を抉られ、その度に軽い絶頂が押し寄せて、快感が止まらない。

「はあ、はあ、ああっ・・・！あ、ああ——・・・っ！」

「巫子ちゃんもうこれだけで随分気持ちよさそうだな・・・でも遊ぶ玩具はまだたくさんあるんだからな、まだまだ許さねえぜ・・・」

「んんっ・・・くっ・・・はああ・・・っ！」

(何が、許さない・・・だ・・・！こっちこそ、許さ・・・ない・・・っ！)

男にふざけた言葉を投げかけられ、炭治郎に一瞬まともな思考と理性が戻った。しかし、胎内の快楽ですぐに押し流されそうになってしまう。

「うあっ！うっ、うううっ！あ、あああああっ！」

(せ、せめて後ろだけの刺激にしてほしい、刺激が強くて、何も考えられない・・・！)
そう思っている内にも、炭治郎はオナホの振動で雛先の先端から白液を吐き出してしまふ。

射精の快感も無惨の陰液のせいで数倍にも跳ね上がり、一度出すだけで次の瞬間には気を失ってしまいうなほどの激悦なのだ。しかし快楽を受け入れられる容量が人より多く、と改造されたこの巫子の身体では、意識を保つてしまう。とはいえ、気を失っても次の刺激で目覚めさせられるだけなのだ。

せめて体勢を崩して少しでも刺激が少なくなるように動ければよい物を、炭治郎の身体は直立した格好でシビアンに跨らされているのだ。秘孔を真下から責める淫具から逃れられるはずもない。

「くああっ！あっ！ああああっ！」

一気に胎の中で快感の熱が広がり、炭治郎は汗を振り乱して顎を反らせて善がり声を上げる。

「へへえ・・・全部入ったあ・・・さあ、突き上げられるのと振動責めとどっちがいい？」

タレ目の男に問われて、炭治郎は一瞬冷や水を浴びたような気分になった。

(そ、そんな両方できるのか?)

「い、いやだ、どっちも、嫌だ・・・！」

「んー？そうか、そうか、じゃあ両方だな」

「っ・・・！うう、・・・っつ、突き上げ・・・」

どちらも激悦を味わわされるだろうが、振動責めは堪え方がわからない。かと言って突き上げも感覚を律せるとは思えないが、そちらを選択するしか炭治郎には答えが無かった。

「んぐっうっ・・・くっ・・・ああ・・・っ！」

「ほらほら、動いちゃうよー？」

男がスイッチを入れると、新たに挿入されたデイルドがゆっくりと上下運動をし始めた。

「んぐつ、んつ！ぷは、はああつ！あつ！あつ！ああああああつ！」

胎内を責める淫具の粒が内壁を容赦なく刺激し、小刻みな突き上げで二秒ごとに絶頂してしまふ。快楽を感じる神経がショートしそうな連続絶頂を受けながら、炭治郎は身体の快楽に悶絶する。しかも雛先や桜色への責めはずっと続いていて、そちらでも絶頂が止まらない。

「うあつ、あああつ！あつ！あつ！あつ！ああつああつ！も、もうだめ、ああああああつ！」
炭治郎の身体が奥を突かれる度に小刻みに跳ね上がり、身体中から汗を流して赤毛を振り乱して善がりまくる。

「ほらほら巫子ちゃん、逃げたらダメだろう？ちゃんと全部しっかり感じないと・・・」

炭治郎の両足を地面から引つ張って拘束しているロープをさらにピンと張って、ますます椅子に両足の間に食い込ませ、快楽の逃げ道を塞いでくる。

会陰に食い込む振動粒の動きが余すことなく身体を刺激し、会陰でも絶頂を迎えてしまふ。ここで絶頂できる者は慣れないと快楽を感じない部位だが、身体のあらゆる性感を発達させられた炭治郎は絶頂してしまふ。しかも、ここで感じる絶頂は、常人なら3回迎えれば気を失うほど強力な快感だ。

それをシビアンに座らされてから、ほぼ間断なく炭治郎は絶頂感を感じている。

オナホを取り付けられた雛先は、さらに振動を強められて先端を回転刺激する部分は速さを増し、射精の快感も止まらない。

度重なる絶頂漬けで、炭治郎の意識が霞む。

「んつ・・・ふあ、あつああ、ああ・・・」

ガクリ、と、とうとう首を垂れて気を失うが、胎内の奥をいきなり淫具で連続殴打され、気を取り戻させられてしまう。

「……っ！あ、ああああっ！」

気づくとすぐに意識が霞む絶頂淫獄に放り出され、炭治郎には気を失うことも許されず責めまくられ、身体から否応なく靈気を無駄に放出し続けている。

一体何分続いたのか、それとも何時間だったのか。炭治郎は気絶と覚醒を繰り返しながら絶頂の波にもまれ、身体は快楽に従順になりつつある。

「はあ、はっ、はあっ！はっ！はああっ！あっ……あああっ……！」

口から淫らな生唾を垂らし、身体からは濃い華の香りを放って、汗まみれの身体を未だにくねらせて快感に悶えている。

延々と意識が白む激流の快楽を与えられ続け、炭治郎の中の意識も変わり、身体が快楽へ従順になってゆく。

「巫子ちゃん大分トロトロになってきたじゃねえか……そろそろ同じ責めばかりじゃ飽きてきただろう？次は振動責めと、速度を調整してやるよ」

炭治郎の腰を撫で回しながら、タレ目の男は背後に回りシビアンを操作し始める。

「いやああっ……！も、もうだめ！おかしくなる、おかしくなりゆううっ！」

快感が続きすぎて、呂律も回らない。そんな炭治郎を愛しくて堪らない、という風に滑らかでふくよかな臀部へ頬ずりをし、男は興奮の声で操作を始める。

「くくつ、すげえ可愛いなあ……もつと気持ちよくしてやるだけだからな……おかしくなっても、俺が面倒見てやつから安心しな」

炭治郎の艶姿に欲情しながら男がスイッチを入れ替えると、胎内を犯していた淫具が上下運動を止める。その代わりに胎内に挿ったまま、振動を始めた。

「んんん——！ああっ！あああああああ！」

歯を食い縛って堪えようとしたが、襲う愉悦には耐えられなかった。冗談のように簡単に絶頂に打ち上げられ、降りようとすればまた打ち上げられる。炭治郎が激しく乱れて嬌声をどれだけ上げようと、振動責めは止まらない。

「はあ、はあ、あああっ！あっ！あっ！あっ！」

デイルドの動きは止まっているが、胎奥まで侵入した物体全体が振動し、下半身を責め上げてくる。無惨の陰気を湛えた結界まで振動させ、炭治郎の意識はぼやけた。

「あっ！ああっ！あ、あ、あ、い、いい、あああっ……！いい、凄くいい、はああ……っ！」

口から淫らに涎を垂らしながら、炭治郎の赫い目がさらに煌煌と煌めき、人が入れ替わったかのように醸し出される雰囲気が一層淫靡に変わる。

「ああっ……い、いい、気持ちいい……ああ、あっ！た、たまらない、あっあああ！あっ！あっ！ああっ！」

背中を仰け反らせて喘ぐその表情には、笑みさえ浮かんでいるかのようだった。炭治郎は狂うことを回避するために淫に耽ることを選び、その快楽を認めて、迎え入れる。

これまででも十分咲いていた花が満開に咲き誇ったように、炭治郎が淫らに開花した。その様を見てタレ目の男もゴクリと生唾を飲み込む。

「へっつ、そうか、気持ちいいか？ようやく素直になったなあ、巫子ちゃん・・・そうだ、前はずっとそんな調子だったなあ。ようやく戻って来てくれて嬉しいぜ・・・！」

炭治郎の顎を掴み、喘ぐ唇に齧り付くと、炭治郎の方から舌を男の口の中に滑らせてくる。あまりの興奮に男の額に血管が浮き上がり、炭治郎の顔全体を舐めるように激しく口づけを施し、舌で舐め回して鼻息を荒くする。

「可愛い、可愛いなあ・・・！」

※中略※

なんだか違う、いつもと違う・・・義勇さんの指が、こんなに感じるなんて・・・

義勇が特別な霊力を使っている気配はない。だとすれば義勇の技巧なのだろうが、初めてのその触れ方が官能の琴線を容赦なく爪弾いて、炭治郎は欲情してしまうのを止められない。

今日の義勇の触れ方は本当にいつもと違う。指でなぞられればゾクゾクと愉悦に対する期待が湧き上がり、掌で撫でられればため息が出るほどの快感が肌の上を走る。

(んっ、気持ちいい・・・)

無惨によって快楽を感じることは悪ではない、と刷り込まれた観念が、炭治郎を朦朧とさせる。

「んっふ……」

身体が火照つてからの口づけは先ほどより数段も甘い。炭治郎は自分の身体が情欲に包まれ、義勇の手によって暴かれてゆくことに、喜びに似た感情を抱いた。

義勇は炭治郎の肌を撫で回しながら時折胸の桜色を掠め、同時に体中に唇を落としてゆく。特に感じる部分は舌で舐め、より炭治郎を感じさせた。

「あっ……うう……」

首筋を舐められ、口づけされながら両胸の桜色を指で転がされ、骨盤の真上から頭のとっぺんまで、ゾクゾクとした快感が走り抜ける。胸の桜色はすでに、このまま激しくされれば絶頂を迎えるほどに性感を高め、それを欲して勝手に肌が疼きだす。

「あっ……義勇……さ……ん……」

右に倒していた左足に手を添え両足を開くと、義勇の身体がその間に滑り込んで、すでに育った雛先が義勇の肌を掠める。直後、泣きたいほどの快感がせり上がり、先端と胎の奥が濡れたのが自分でも分かってしまった。

炭治郎が濡れているのに気づいた義勇は、首筋からへソまでを唇で這い下り、下着の意味を持たなくなっているショーツに辿り着いて、ショーツの割れた中心を結んでいるリボンを一つ一つほどいてゆく。

ちゅ、と濡れた音がして炭治郎の雛先が勢いよく屹立し、濡れたその姿を義勇の眼前に現わしてしまう。白いレースの布の間から突き出る少年の雛先は生唾を飲むほど妖艶だった。その上体に纏っている透けたロングキヤミソールの端を恥ずかしそうに手に絡め、顔を赤らめて背けている様も愛らしい。

この世にこれほど可愛らしく淫靡な生き物があつただろうか、と義勇は衝撃を受けた。戯れに室内の自動販売機で売っていたベビードールなる俗っぽいものを炭治郎に着せてみたが、効果は抜群で、女が着るものを少年が着ているという背徳感もあって余計に義勇の劣情をそそった。

ロングキャミソールの胸のリボンをほどこき、安い生地感触とは比べ物にならない、炭治郎の素肌の上を、義勇は何度も撫でる。このまま撫でていれば、いつか溶け合つて至極の境地に堕ちてしまいそうな肌だ。胸をおり、腰をおり、炭治郎の両の大腿に手をかけ、目の前に雛先の屹立がある位置にまで、義勇は降りた。

恥ずかしい下着からいやらしくはみ出た自分の器官が恥ずかしくて、炭治郎は両手で下半身を覆おうとしたが、簡単に義勇に片手でまとめられて抵抗の術を失ってしまった。

すぐに雛先に熱くぬめる物体が下から上へと這い上げ、目を細めて両足の間を見ると、義勇が自分の雛先を舌で舐めていた。

「ぎ、義勇さん、そんなこと、しないでください……！」

炭治郎の訴えには耳を貸さず、義勇はぬめった舌で何度も下から上へと舐め上げ、時折先端のくびれを舌先で挟り、炭治郎の性感を容赦なく高めてくる。

「んぐっ……んっ……ああ、あつ！あああつ！だ、だめ、出る……！ああああ……」

これまでの義勇の愛撫で敏感になった身体は、少しの刺激ですぐに絶頂感を迎えてしまう。しかし義勇は快感が長く続くように、激しい動きはわざとしない。舌と唇で舐め、吸い上げ、少しずつ快感を与えて、炭治郎を身悶えさせる。

「はあ、あ、ああ、あつ・・・ああ・・・あ・・・あつ、んっ・・・はあ・・・」

炭治郎の声がどんどん甘く熱いものに変わり、両手は義勇の髪を掴んでいる。早く絶頂したくて、義勇の愛撫が中断されると腰が勝手にカクンカクンと小さく動き、無意識に快楽を乞うてしまっているのに、炭治郎本人は気づいていなかった。

「んっ、んっ・・・ああ、も、もう・・・はあ、そ、それを、続けて、あつ、止めないでください・・・あああつ・・・！」

先端を舌で捏ね回され、急に根元に移動されて快楽をはぐらかされ、また先端への愛撫に戻る。炭治郎の雛先からは淫液がどんどん溢れ、義勇が舐め取っていなければ腰の下は水溜まりになっていただろう。

(義勇さん意地悪だ、早くイカせて欲しいのに・・・)

当の義勇は雛先から離れ、炭治郎のくしゃくしゃになったベビードールをまくり胸の桜色を露にして、また舌と指で愛撫を始めた。

舌での愛撫はぬるぬるとしていて熱く、ため息が出そうな快感だ。一方の指での愛撫は捏ね回されたり指先で弾かれたりして、快感がその度に炸裂する。

「んっ・・・義勇・・・さん・・・」

炭治郎の腰が義勇の腰に絡みつき、雛先がバスローブへ当たる様、故意に密着しようとする。バスローブの布地だけで涎が出そうな快感がゾクゾクと込み上げて、炭治郎はジン・・・と感じる快感に身体を震わせた。

「そう言えば、制限時間があつたな。俺は何時間でもいいが、遅いと錆兎が気をもむ」

義勇がそう言い出し、炭治郎は射精させてくれる予感に胸を高鳴らせた。自分から快楽を期待するなど浅ましい、と錆兎に叱られそうだが、大人の錆兎はここにいない。

大人の色香が漂う細長く白い指が、炭治郎の下半身に降りてくる。

「炭治郎、両足を開いて腰をあげろ」

そう言われる時の体勢は決まっている。炭治郎は両足を左右に大きく開いて膝が肩に付くまで身体を折ると、膝裏を掴んで体勢を固定した。

羞恥極まる、いわゆる「まんぐりがえし」という体勢だが、交わりによって淫鬼を浄化する炭治郎にはほとんど羞恥など感じない。しかし、義勇を相手にすると、羞恥心がたつていつまで経っても慣れることが無い。

「うん、よく濡れてる・・・指を挿れるぞ」

「は、はいっ・・・んんっ！」

腰の奥が痺れる快感が走ったと思った瞬間には、義勇の指が炭治郎の胎内に挿っていた。指が挿された瞬間、ぶちゅつと淫猥な音がして、炭治郎がどれだけ興奮して淫蜜を垂らしているのかわかる状態だ。義勇はその中を探り、炭治郎の性感帯をさぐる。

さぐられる炭治郎は、義勇の指が動くたびに足が震える快感が巻き起こり、ジンジンと洞内の快感が暴かれてゆく。まだ性感帯に触っていないのに、もう絶頂しそうなほど持ち上げられて、炭治郎は涙目で義勇を見下ろした。

すると何故か顔を上げていた義勇と視線が合い、炭治郎は恥ずかしすぎて瞬間的に目を瞑り、顔を背けた。

(可愛い)

炭治郎の感じる顔も、羞恥に悶える顔も、全て可愛らしい。

義勇は密かに笑みを浮かべ、炭治郎の身体の中を探り、快感を蓄積させた。

「んぐううっ！あつ！あああつ！」

炭治郎の腰がビクンと跳ね上がり、性感帯に当たったのだと知れた。義勇は極点を当てると、その部分を中心にして、指先で擦ったり連続で押ししたりを繰り返す。

「うああつ・・・！あつ、あああつ！ああ、はあ、ああ・・・！ぎゅ・・・さ・・・も・・・」

指をもう一本増やされ、一気にドチュっつと突き挿れられた瞬間、炭治郎の脳天にまで突き抜ける愉悦が走破した。

「あつ・・・ああ・・・あ・・・ああ・・・っ」

気持ち良く迎えられた胎の絶頂に、炭治郎の思考は霞がかかって、身体は絶頂の余韻を貪ることに集中してしまっている。しかし余韻冷めやらぬうちに義勇はさらに指を折り曲げて強く性感帯を押し、また炭治郎を絶頂させる。

「あああ・・・っ！あつ！あああつ！あ、ああ——！」

炭治郎の裏返った甘い艶声が部屋に響き渡り、秘孔から淫蜜が噴き零れる。瑞々しく若い肌に、卑猥な下着が絡まっっているうえに蜜が零れる姿は背德的で、さらに義勇の食指をさらにそそった。

「んあああつ！ぎ、義勇さん、もう、イッた、イッたから・・・あああつ・・・！あ、あああ・・・！ま、また・・・あああ・・・」

何度も性感帯を刺激されて連続絶頂を繰り返され、炭治郎の身体は愉悅に陶醉してゆく。触れなくても難先の手端から白液が何度も吐き出されたが、義勇が戯れにそこへ指を伸ばして上下に扱くと、炭治郎はより激しい反応を示し、義勇の目を愉しませる。

「んあああああつ！い、いまは、そこっ……はっ……あつ……！……っ！……っ！」
気持ち良すぎて善がり声も出ない。

「あううううっ！」

※中略※

「あ、あつ！ああつ……あ、はあ……あ……あつ……」

炭治郎の中に挿ったまま腰を揺さぶり、さらに奥へと身体を進めてゆく。炭治郎の洞内は、いや、とか、だめ、という言葉とは裏腹に、鑄兎を奥へ奥へと誘って脈動して、さらなる快感を求めている。

痛いほど締め付けるのに、それ全部が柔らかく、酷く濡れた感覚とザラザラした感触も同時に感じて、その強烈な快感に鑄兎は今にも放ちそうだった。

胸の突起に手を滑らせて指先で摘まんで擦ると、炭治郎の上半身がビクビクと痙攣し、無意識に鑄兎の両手にしがみついて来る。

この身体、どこを触ってどこを突けば悦を得るのか、鑄兎は全て把握していた。

「ほら、炭治郎……まだだ、正気を保つてくれ」

「んっ・・・はあ、鑄兎お・・・俺、頭回らなくなるかもしれない・・・」

「いいんだ、今日だけは」

とろんとした目で申し訳なさそうに鑄兎に訴えかける炭治郎がいじらしい。

鑄兎は天上の愉悦を味わいながら炭治郎の胎を探り、最も弱い部分に狙いをつける。そこを激しく擦る様に腰を前後させると、炭治郎は一瞬目を見開き、次いで甘い叫び声を上げた。

「あっああああっ！だ、だめ、ああああっ！そ、そこっ・・・さびっ・・・ああああっ！」

神経をむき出しにされたような箇所には熱い雄の器官が擦りつけられ、炭治郎の中に電撃のような快感が生まれる。

汗を飛ばして悶える炭治郎の頭を撫で、鑄兎は腰の動きを続けながら呟く。

「お前の感じる姿は最高だな。まだまだ奥にまで達していないのに、途中の感覚とその表情で、また放つてしまいたい」

「うう・・・」

今まで鑄兎にそのような言葉を掛けられたことが無い炭治郎は、なんと反応すればよいのかわからない。その戸惑いも照れも、次の動きですぐに霧散させられ、快楽の波にほだされる。

「あっ、あっ、ああ、あっ、あっ、あっ、あっ、ああ・・・っ！ふあ、深い・・・奥、まだ・・・」

「うん、進む」

その途端、炭治郎の胎が蠕動し、さらに鑄兎の渾身を強烈に締め付けて扱き始めた。炭治郎の意思は判然としないが、身体はこれから与えられるであろう快感に期待して、愉悦はまだかと焦がれている。

鑄兎は腰の動きを休めることなく、炭治郎に口づけする。鑄兎の熱い舌が口腔を撫で回し、脳の快樂中枢に一番近い場所を具合よく愛撫されて、首の後ろがチリチリするのを感じながら、耳や頭皮にも快樂が走るのを感じる。

炭治郎も鑄兎の舌技に負けじと舌を動かすが、快感で朦朧とした意識下では、舌も碌に動かせていない。

「あっ……んく、だ……め……ああ、お、おかしく、なるっ……なっ……んん……」
うわ言のように呟き始めた炭治郎の頭を優しく撫でながら、鑄兎は優しい表情で言った。

「大丈夫だ、お前はおかしくならない。俺がそうさせない」

とは言いつつ、炭治郎におかしくなりそう、と思わせている所作をしているのは当の鑄兎だ。しかし、炭治郎の限界は知っている。限界と言っても、普通一般人とは比べ物にならない程それは高い。

だから、鑄兎も思う存分炭治郎を抱ける。

自分の淫欲のまま、相手を抱くのはいつぶりだろうか。思い起こしてみれば、鑄兎はいつも己を抑えていたような気がする。

これまで二年の修行で炭治郎の身体を仕立て上げたのは自分なのだ。炭治郎のことなら、足指の爪の先から髪の毛の先端まで熟知している。

こうやって、交わりながら頭を撫でられるのが好きなことも、全て把握済みだ。

「炭治郎、挿るぞ……」

「う、うん、はあああ……いいよ、鑄兎……」

炭治郎の陶醉した声を快く聞きながら、鑄兎は炭治郎の両足を抱え直し、腰をさらに深くへ進めた。

「うっ……！ぐっ、あああ、あ、あああっ！」

胎の中で明らかに締め付けが強くなる部分があり、炭治郎が叫び声を上げて鑄兎にしがみついた。鑄兎も胎内で、ぐぼ、と内臓器官が鳴る音を感じ、最奥の結腸まで辿り着いたのだと知覚する。

そこは灼けるように熱く、鑄兎を追い出すかのように強い締め付けをしてくるが、満たされる淫液のぬるつきが相乗効果となって、垂涎ものの激悦が鑄兎にもたらされる。

「あ……ああ、あっ、あっ、ああああっ……！さ、鑄兎おっ……！俺、も、もう、達した……」
はあはあと息を乱しながら、炭治郎が涙を流しながら上目遣いで鑄兎に哀願する。これ以上の快楽は耐えられないとばかりの訴えだが、これからが本番だ。

「うん、知ってる」

また炭治郎の頭を撫で、口づけをしながら鑄兎は優しい声で言う。

「——っ！あっ、ああ、あっ！あっ！あっ！あああああっ！だ、だめ、深iiiiiiiiっ！」

鑄兎の渾身の先端が最奥をコツコツと叩く度に、背骨を伝って髪の毛の先にまで高電圧の快楽電流が流される。奥を突かれる度に絶頂しているほどの快感で、炭治郎はたちまち意識を混濁させる。

これまでどんな淫鬼に犯されても、これほどの愉悦を得ることはできない。義勇と交わった時でさえ、炭治郎は極限まで意識を保っていたつもりだが、鑄兎には敵わない、と感じた。

それは男の扱いとしては酷く無神経なものだが、長期間に渡って炭治郎を仕込んできた鑄兎には、性の教義を習得した義勇でさえ敵わない。その上、鑄兎は義勇より一段上の教義を習得している。

炭治郎の中に残留した無惨の陰気を封印し、壊れないように抱いてきたのは他ならぬ錆兎だ。彼以上に、誰が炭治郎の身体を知る者が居ようか。

錆兎に触れられる場所、耳、唇、首筋、胸、下腹、雛先、胎内、全てがドロドロに甘く溶けてゆく感覚に、炭治郎の理性が持ち堪えられない。

内壁の奥を連打され、その度に絶頂の熱が湧き上がり、さらに一突きごとに絶頂の深さが増してゆく。どこまでも終わらない快楽の奈落に、炭治郎は怖気さえ感じたが、相手が錆兎であることにすぐに安堵してその背中にしがみついた。

(相変わらず、愛らしい反応をする)

自分を求めていると相手に錯覚させるような仕草はまさに、男泣かせだ。炭治郎はこれを自然にやってみせる。だから、余計に小憎らしく、仕様がなほほど可愛い。

「あ、あ、錆兎お・・・あ、あああつ！お、おかしく、なるっ！気持ち、よくて、ああ、ほんとに、もうっ・・・！」

これまでにない錆兎の激しい腰遣いと、性感帯を連打される激悦に、炭治郎が泣き声で錆兎にしがみつつきながら喘いでいる。

奥を突かれるたびに炭治郎の身体が上下に揺れ、小刻みな振動で赤い髪がばさばさと揺れている。

「ふあ、あああつ！あつ！あつ！あつ！あつ！あああああつ！」

これまでで一番深い場所へ渾身を突き挿れ、そこで炭治郎の身体が激しく痙攣した。恐らく想像もつかない快楽を味わっているのか、半開きの唇から舌がのぞき、淫らな唾液が口の端を伝い、赫い目をぎゅうと閉じて愉悦の奔流に耐えている。

その愛らしくも艶やかな表情に錆兎は我慢できず、そのまま最奥で精を勢いよく放ってしまった。

「ううっ・・・」

「あああああっ！熱い、熱い、んんんっ！灼けるっ！ふあ、ああああ・・・溶けそ・・・

※続きは製品版でお楽しみください。

